

唐 櫃 山 古 墳

大阪府教育委員会

唐櫃山古墳

大阪府教育委員会



1 調査区（右）と唐櫃山古墳後円部残丘（左） 2 調査区全景（西から） 3 同左（東から）

序 文

唐櫃山古墳は、藤井寺市国府にある墳丘長53mの前方後円墳です。この古墳は、古市古墳群の中にあります。北側に隣接して墳丘長230mの允恭天皇陵古墳(市野山古墳)があり、その陪塚の一基と考えられています。

唐櫃山古墳は、昭和30年に、道路工事に伴う発掘調査によって、5世紀の古墳であることが確かめられました。石室内に九州の阿蘇溶結凝灰岩製の家形石棺が納められ、甲冑や馬具など、多数の副葬品も発見されました。

唐櫃山古墳からは、今回の発掘調査によって、墳丘や周濠の一部が検出され、埴輪なども多数出土しました。これらの遺構・遺物は、当地域の歴史を解明していく上で、かけがえのない貴重な資料になるものと思われます。

現在、本府は、堺市・羽曳野市・藤井寺市と共に、百舌鳥古墳群と古市古墳群の世界文化遺産への登録を目指しており、今回の発掘調査結果につきましても、古墳群の価値を証明する貴重な資料となり得るものです。

本調査の実施にあたっては、地元の方々をはじめ、大阪府都市整備部、近畿日本鉄道株式会社をはじめとする関係各位に、多大なご協力を賜りました。厚く感謝いたしますとともに、今後とも文化財保護行政に一層のご協力とご理解を賜りますようお願い申し上げます。

平成23年3月

大阪府教育委員会事務局
文化財保護課長 野口 雅昭

例　　言

1. 本書は、大阪府教育委員会が大阪府都市整備部の依頼を受けて実施した主要地方道堺大和高田線の歩道整備工事に伴う、藤井寺市国府1丁目所在、唐櫃山古墳の発掘調査報告書である。
2. 本調査の調査番号は、09022である。
3. 現地調査は、文化財保護課調査第二グループ副主査 西川寿勝を担当者とし、平成21年9月10日から平成21年10月31日まで実施し、遺物整理は調査管理グループ主査宮野淳一、同三宅正浩、副主査藤田道子を担当者とし、現地調査と併行してすすめ、平成23年3月31日にすべての事業を終了した。
4. 出土遺物及び記録資料は、本府教育委員会において保存・管理している。
5. 検出遺構の写真撮影および、本書の執筆・編集は、西川寿勝が担当した。なお、古墳葺石の分析と採取地について、奥田尚氏・加藤治樹氏に執筆いただいた。
6. 出土遺物の写真撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
7. 発掘調査・遺物整理および、本書の作成に要した費用は、大阪府都市整備部が負担した。
8. 本書は、300部作成し、一部あたりの印刷単価は、777円である。

本文目次

序文

例言

本文目次挿図目次図版目次

第Ⅰ章 位置と環境..... 1

1節 歴史的環境

2節 調査経緯

3節 調査方法

4節 屢序

第Ⅱ章 調査成果..... 7

1節 唐櫃山古墳墳丘上面と周濠の調査

2節 唐櫃山古墳墳丘の調査

3節 その他の遺構の調査

4節 出土遺物

第Ⅲ章 唐櫃山古墳周濠出土石材とその採石地（奥田 尚・加藤治樹） 32

第Ⅳ章 まとめ..... 35

1節 調査成果について

2節 唐櫃山古墳の被葬者像

実測遺物対照表

図版

報告書抄録

挿 図 目 次

図1	周辺遺跡分布図	2
図2	調査区位置図	4
図3	地区割図	5
図4	調査区全体図	8
図5	古墳周濠と堆積状況図1	10
図6	古墳周濠と堆積状況図2	11
図7	その他の遺構と堆積状況図	12
図8	サヌカイト製石核	13
図9	周濠出土須恵器	14
図10	円筒埴輪1	15
図11	円筒埴輪2	16
図12	円筒埴輪3	17
図13	円筒埴輪4	18
図14	円筒埴輪5	19
図15	円筒埴輪6	20
図16	円筒埴輪7	21
図17	円筒埴輪8	22
図18	朝顔形埴輪ほか1	23
図19	朝顔形埴輪ほか2	24
図20	形象埴輪	25
図21	墳丘盛土内出土埴輪	26
図22	古代の遺物	28
図23	中世の遺物	29
図24	近世の遺物	30
図25	不明鋳型	31
図26	石材の石種とその粒径・粒形	34
図27	中国史料による倭の五王、記紀による天皇の系譜	39
図28	実測遺物対照表1	41
図29	実測遺物対照表2	42

図 版 目 次

卷頭図版 調査区全景

- 図版 調査区全景(西から)
- 図版1 調査着手時の状況
- 図版2 調査状況
- 図版3 墳丘および周濠堆積状況
- 図版4 調査区全景
- 図版5 周濠
- 図版6 中世の溝
- 図版7 円筒埴輪口縁部
- 図版8 円筒埴輪体部
- 図版9 円筒埴輪底部
- 図版10 円筒埴輪底部・埴丘盛土内出土埴輪
- 図版11 円筒埴輪細部
- 図版12 形象埴輪
- 図版13 朝顔形埴輪
- 図版14 サヌカイト製石核・須恵器
- 図版15 石製硯・不明鋳型
- 図版16 古代の遺物・溝3出土遺物
- 図版17 中世の遺物・近世の遺物
- 図版18 唐櫃山古墳の石材1
- 図版19 唐櫃山古墳の石材2

第Ⅰ章 位置と環境

1節 歴史的環境

今回の調査地は近鉄南大阪線土師ノ里駅駅舎の北側に位置する。この地は南に土師寺（道明寺）があり、土師氏の故地として知られるほか、世界遺産候補である古市古墳群に含まれる。また、埋蔵文化財の包蔵地としては国府遺跡内にもあたり、大正6年に、わが国で最初に層位的な発掘調査が行われ、京都大学の浜田耕作氏によって縄紋時代と弥生時代の地層的な差異がはじめて明らかにされたことで学史的にも有名である。

国府遺跡は旧石器時代・縄紋時代・弥生時代の各遺構・遺物が知られるが、とくに南端は土師ノ里遺跡と接し、古代から中世にかけての集落遺跡として発展していたことも知られる。今回の調査でも古代から中・近世にかけての遺物がみつかっている。ただし、調査区の大半が唐櫃山古墳の墓域にあたり、本節では古墳時代に関する歴史的環境を記す。

唐櫃山古墳の含まれる古市古墳群は350年頃から550年頃にかけて連綿と営まれたわが国有数の古墳群である。東西約2.5km、南北4kmの範囲内に全長200m以上の大型前方後円墳6基を含む、120基以上（現存87基）の古墳で構成される。古市古墳群は百舌鳥古墳群とともに、その一部が国史跡に指定され、平成22年9月にはユネスコ世界遺産の国内暫定リストに追加され、世界遺産登録に向けて準備が進められている。

古墳群は北に新大和川、西に石川に画された標高24m以上の洪積段丘に営まれている。一部は南西の羽曳野丘陵に及ぶ。北群は菅田御廟山古墳（伝応神陵）・仲津山古墳（伝仲津姫陵）・市野山古墳（伝允恭陵）・岡ミサンザイ古墳（伝仲哀陵）など、500年代までの一群で、南群は軽里大塚古墳（伝白鳥陵）・ボケ山古墳（伝仁賢陵）・白髮山古墳（伝清寧陵）など、前方部の著しく発達した新しい一群からなる。大型前方後円墳の周辺には、中・小型前方後円墳、ホタテ貝式古墳、方墳、円墳など多彩な古墳がみられる。さらに、古墳の空闊地とされる林遺跡や土師ノ里遺跡などの発掘成果によって、過去に破壊された埋没古墳や埴輪を主体部とする土塙墓群などの存在も確かめられている。

主要古墳は陵墓の治定をうけ、調査や立ち入りは禁止されている。しかし、古墳周辺部の調査や墳形測量図の検討などから築造序列がほぼわかっている。それは津堂城山古墳（208m）・古室山古墳（150m）、仲津山古墳（290m）・宮山古墳（154m）、菅田御廟山古墳（425m）・葛山古墳（225m）、市野山古墳（230m）、軽里大塚古墳（190m）、岡ミサンザイ古墳（242m）、ボケ山古墳（122m）、白髮山古墳（115m）、峯ヶ塚古墳（96m）、高屋城山古墳（122m）の順に造営されたようだ。

唐櫃山古墳は古市古墳群中の北東隅に位置する市野山古墳の陪塚とされる。この古墳は全長約53mの前方後円墳で、ほぼ北側に向く前方部は低く短い。後円部の頂上からは板石で囲まれた竪穴式石室に阿蘇凝結凝灰岩の家形石棺が納められており、副葬品なども判明している。



図1 周辺遺跡分布図

2節 調査経緯

唐櫃山古墳は昭和30年に主要地方道堺大和高田線の建設工事が行われ、古墳の大半が削平される危機に及び、北野耕平氏を中心として発掘調査が実施されている。現在、墳丘の大半は失われ、後円部北側の一部が個人住宅の庭園にされているものの、消滅に近い状況にある。

昭和30年の発掘調査は後円部中央の内部主体に限られたものだった。このとき、主軸に直行する小型の竪穴式石室と古式の家形石棺が発見された。しかし、石棺の中は過去の盗掘で大半の遺物が持ち去られており、ガラス玉のみ発見された。棺外の副葬品は盗掘されておらず、南側からは小札鉢留式の衝角付冑、小札鉢留式の眉庇付冑、三角板鉢留式の短甲・肩甲・頸甲などの武具類、北側からは鉄地金銅張の轡など、馬具類が発見された。

発掘調査の後、古墳の大半は破壊されて府道となっていた。昭和56年に道路敷きに日本電信電話公社や関西電力株式会社による埋管工事が実施されるおり、発掘調査が実施された。その結果、墳丘の一部と周濠が確認され、崩落した円筒埴輪や葺石の存在が確認された。また、平成13年には道路北側に歩道を拡幅する事業が行われ、それに先立って、やはり墳丘の一部と周濠が確認されている。

さらに、府道堺大和高田線と国道旧170号線の交差点改良工事が計画された。あわせて、近鉄南大阪線土師ノ里駅の駅舎の整備も進められている。以上により、平成19年と21年に府道堺大和高田線の南側で発掘調査が実施された（図2）。

また、平成22年には旧国道170号線が近鉄電車をまたぐ橋脚の建替え部分について、立会調査を実施した。しかし、この部分については昭和のはじめに橋脚が建設されたときに地山が削られていることが判明した。

19年度の調査では古墳後円部の西側周濠が、今回報告の21年度の調査では、その続きの周濠部分と墳丘をはさんで東側周濠などが確認されている。今回調査は唐櫃山古墳の後円部南端とその東西の周濠部分を貫くように東西約50m、幅2～3mで実施した。

西端は19年度調査区に接する。調査の結果、唐櫃山古墳の墳丘は道路建設などで削平されていたが基底部は路床下に1m程度残存することが判明した。残存墳丘のもっとも高いところは標高約29mを測る。

現地調査は平成20年9月はじめに実施、同年10月末に終了した。遺物整理作業は現地調査と併行して開始し、平成23年3月末に終了した。調査区の南は急峻に切り土され、駅ホームと線路であり、防護ネットを張った。北側は大型自動車が頻繁に行きかう幹線道路で歩行者も多い。それで、調査区北壁に簡易矢板を打設して、路床の崩落を防止した。発掘調査は地表面の構造物を重機で除去し、掘削土はすべて場外に搬出して行った（図版1）。

本書を刊行するにあたり、遺構・遺物図面の浄書をデジタル図化し、省力化をはかった。アドビシステムのイラストレータcs 2による。

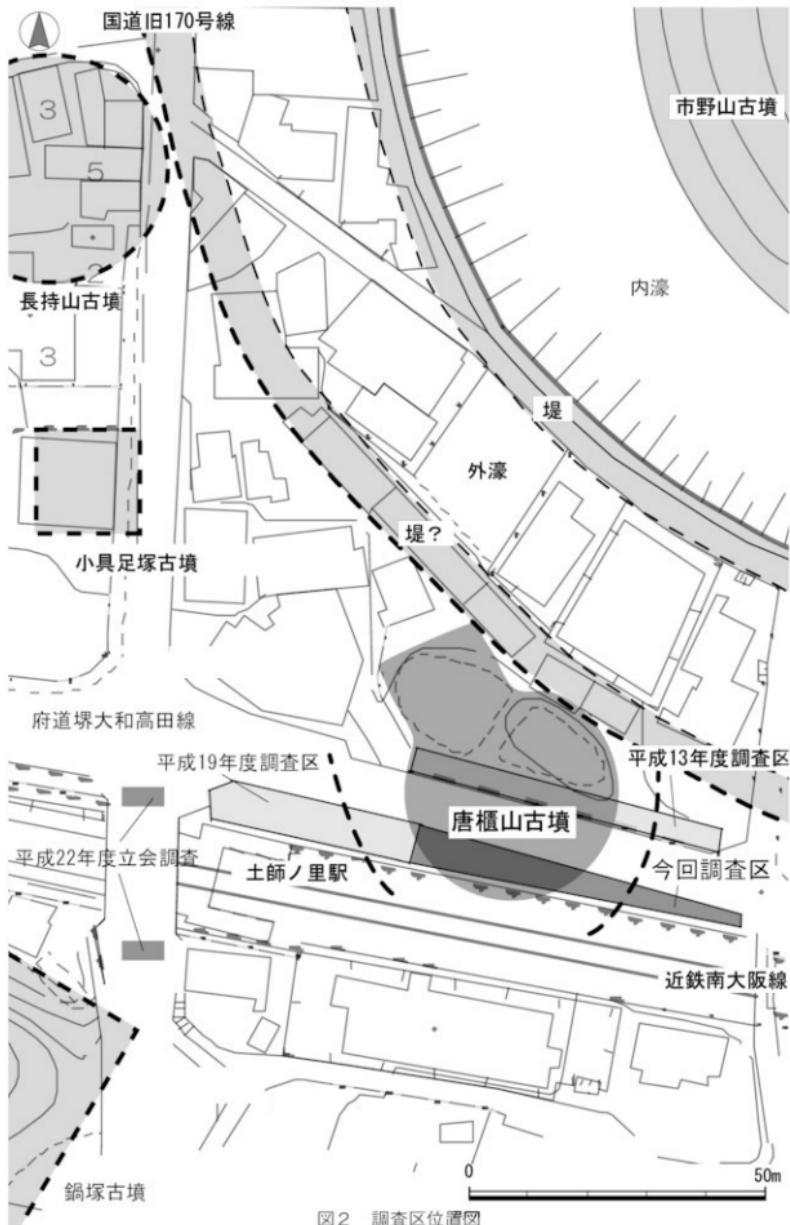


図2 調査区位置図

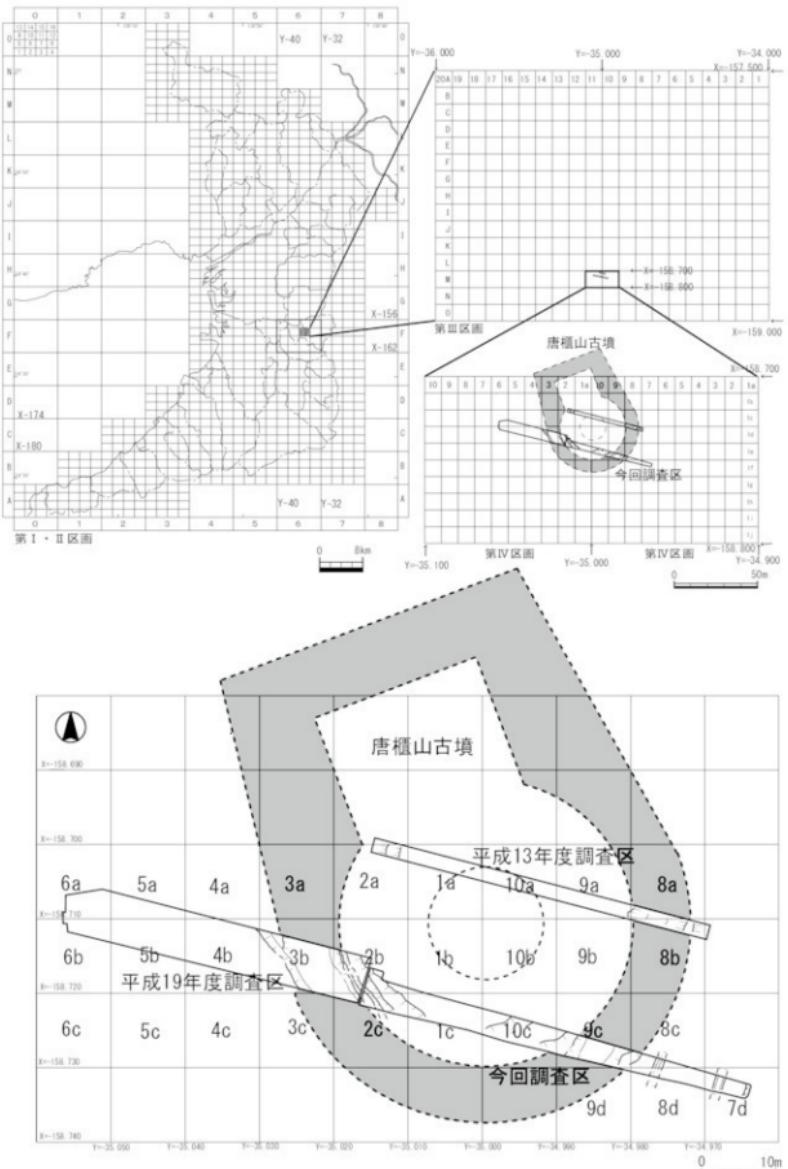


図3 地図割り図

3節 調査方法

大阪府教育委員会・大阪府文化財センターの発掘調査は調査区の位置を共通して表現できるよう、大阪府発行1/10000地形図を基準として4段階の区分を実施している(図3)。第Ⅰ区画は南西隅を基準として縦軸をA~O、横軸を0~8に区画する。唐櫃山古墳は藤井寺市の西隅に位置するF6区内にある。

第Ⅱ区画は第Ⅰ区画の南西隅を基準として16等分したもので縦1500m、横2000mの範囲である。唐櫃山古墳は11区内にある。

第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を100m方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸を1~20、横軸をA~Oに区分したものである。今回調査地は10M区と11M区内にあたる。

第Ⅳ区画は第Ⅲ区画を10m方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸をa~j、横軸を1~10に区分したものである。今回調査区はF6-11-10M-2bと2cと1c、F6-11-11M-10cと9c・8c・8d・7dである。本文中の北は座標北を示す。水準は東京湾平均海面(T.P.)を使用した。

4節 層序

これまでの調査で調査区周辺は道路建設などに伴い、約1mの盛り土があり、その直下に削平された墳丘があることがわかつていた。また、土師ノ里駅の奈良行きホームの北側に残存する墳丘を土留めするコンクリート壁などの構造物も地表に残されていた。

地山は墳丘盛土の下にあり、砂礫が混じる赤褐色粘土である。洪積段丘の辺縁にあたるようだが地山面の形成時期は定かでなく、二次堆積の可能性もある。ただし、北側府道を簡易矢板で防護する調査だったため、地山深層の堆積状況や遺物の有無は確かめていない。地山の色調や含有する砂礫は調査区西端、東端でもさほど変化はなかった(図5~7)。

調査は現代の盛土を機械掘削で除去し、人力掘削で墳丘などを精査した。墳丘と周濠を調査した後に、墳丘盛土を地山まで人力掘削して堆積状況などを調査した。遺物包含層ではなく、基本層序は現代盛土と墳丘盛土で、その下に地山がある。現代盛土は三種類に分層できるが府道建設に関連するものだろう。墳丘盛土は地山粘土に砂利や埴輪片が混じるもので、ブロック土の互層堆積は見られたが、明瞭に分層できるものではなかった。

後円部東西の周濠はいくつに分層できた。西側周濠は以前の調査によって江戸時代の修築盛土で埋め立てられていることが確認されており、今回調査でも肥前磁器が発見されている。対して、東側周濠は崩落した土砂などが互層堆積、一部は墳丘盛土を覆う。また、葺石とみられる人頭大~握拳大の円礫が多く含まれていた。上層には古代・中世の土器も含まれる。ただし、滯水による堆積土はない。また、後世に水田化されたような土壤、水平堆積の層、整地層などもみられなかった。周濠のこの部分は中世頃には埋没したらしい。

第Ⅱ章 調査成果

1節 唐櫃山古墳墳丘上面と周濠の調査（図版1～5）

現代盛土を機械掘削で、1m程度除去したのち、人力で表面を精査すると削平を受けた墳丘が現れた。現代盛土は三層に分層できるが、すべて府道建設に伴うものだろう。調査区の西端は墳丘が南西に低くなっている、周濠の一部であることがわかる。また、そこから10mほど東側でも、墳丘は東に低くなり、東側周濠の落ち込みと判断した。

このようにして、古墳の墳丘と周濠を確認した。部分的に表土が残る部分があったものの、本来の墳丘盛土上面ではなく、府道と線路との間の空閑地では削平後に表土が形成されたと考える。削平された墳丘盛土上面からは近世の陶磁器と埴輪片が少量発見されている。

西側周濠の上面からは19年度の調査で近世の修築盛土が確認されていた。はたして、この盛土に対応するにぶい黄褐色砂土層が確認された。この層下で、北西から南東に伸びる溝1が発見された。19年度調査の溝01に対応するものである。この溝は19年度の調査では、近世の遺物が確認されている。

西側周濠の堆積土はほとんど残されていなかった。調査区の西南隅で砂礫を大量に含む暗褐色土がわずかに確認されたに過ぎない。19年度の調査では周濠上面で近世耕作面とされる旧地表が確認されているものの、今回の調査では耕土は確認されず、上面は削られているらしい。西側周濠と墳丘の間には幅約1mのテラス状平坦面がみられた。

東側周濠は幅約10m、深さ約2mを測る。滞水による堆積物や粘土層ではなく、上層は地山のブロック土などによって人為的に埋め戻されたようだ。下層は西の墳丘斜面が崩落して堆積した様相だった。地山直上には人頭大～握拳大の葺石が帶状につらなり、その隙間に埴輪・須恵器壺破片などが数多く散乱していた。周濠の堆積物は墳丘盛土上面に及んでおり、地山は周濠をはさんで西側が東側より約50cm程度低い。

周濠の東側（外側）からも地山の赤褐色粘土の流れ込みがみられた。この層に埴輪などの混入はほとんどなかった。周濠の断面形は滑らかなU字形で掘底はやや平らだった。

平成13年度の調査でも幅約9m、深さ約2mの東側周濠が確認されており、対応するものである。このときの調査では周濠上面に15世紀代の瓦質羽釜などを含む黄褐色砂土があり、埋没時期の一端を示すと考えられている。今回の調査でも同時期の瓦質土器などがいくつか発見されている。また、東側周濠の埋土下層から飛鳥時代の土師器小壺がまとまって発見されており、この時期には周濠があまり埋まっていなかったようだ。

周濠の東側（外側）は地山が水平につづく。旧地表は削平されており、外側に堤があったかはわからない。

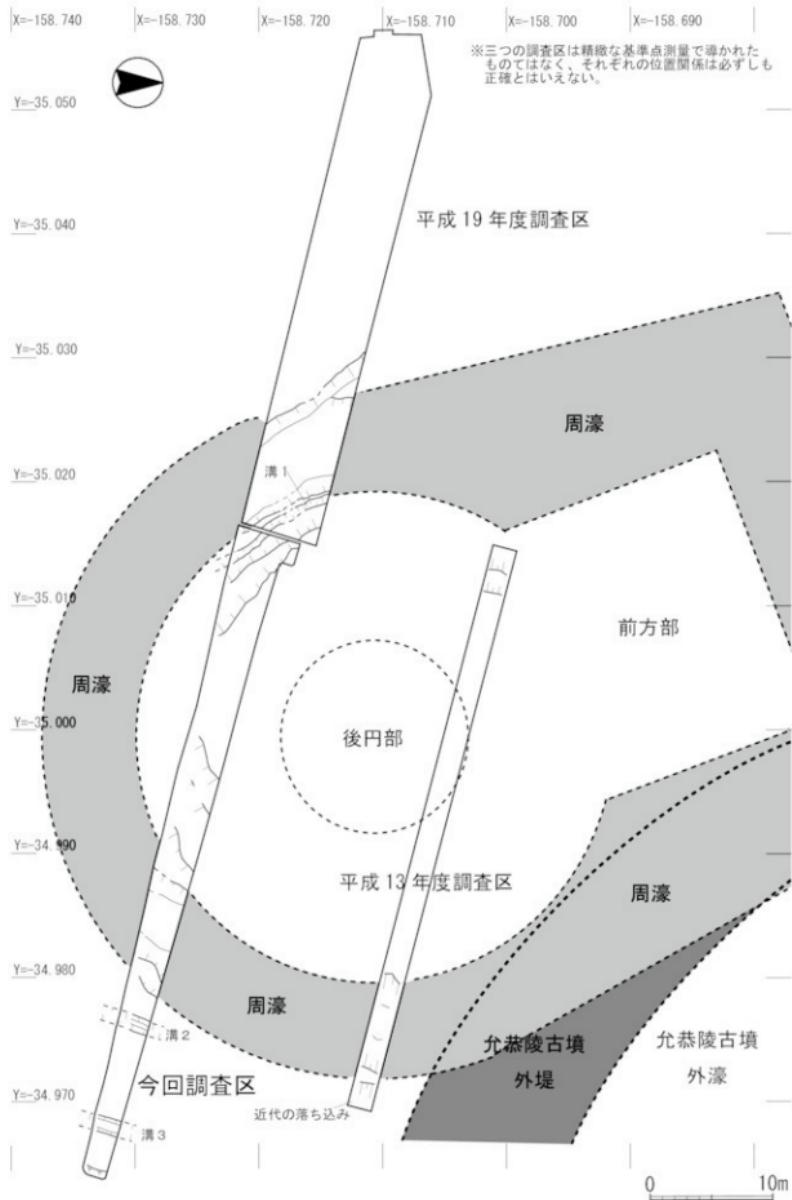


図 4 調査区全体図

2節 唐櫃山古墳墳丘の調査（図版4下）

西側周濠と東側周濠の間は、長さ約30mにわたって、墳丘盛土がみられた。墳丘盛土の上面は削平を受けており、昭和30年の外形測量当時の旧表土は残されていなかった。墳丘盛土を人力掘削すると、多くの埴輪の混入がみられた。

墳丘盛土の下には砂礫を大量に含む赤褐色粘土があり、古墳造営以前の旧地表はなかった。したがって、古墳の造営は旧地表を一部除去して行ったようだ。その結果、周濠東側（外側）の地山面と50cm以上の高低差が生じたものと考える。また、墳丘盛土下の地山面は平らでなく、部分的な凹凸がはげしかった。ところが、平成13年度の調査では地山と墳丘盛土の間に約10cm程度の旧表土が残されていた。標高は28.2m前後でほぼ水平である。今回検出された地山面は標高28.5m前後である。つまり、古墳造営時は南端がもっとも高所で、北にゆるやかに低くなる。造営当初、南の高まりを粗く削って地盤を水平にして、平面プランを決定したようだ。これは一瀬和夫氏による旧地形の復元にも対応する（大阪府教育委員会1981『允恭陵古墳外堤の調査』）。

墳丘盛土は後円部南側斜面のもので、その堆積土が古墳造営時の純粋なものか、道路建設時に後円部頂の土砂を削平したときの二次堆積土を部分的に含むのか判然としない。明らかに二次堆積土になる表土や時期の下る遺物は含まれなかつたが、部分的に樹の根がみられた。また、周濠上面にも削平された墳丘盛土の二次堆積層ではなく、道路建設に伴う削平土は搬出されたようだ。墳丘盛土に含まれる埴輪片が古墳造営時に混入したものであれば、市野山古墳の堤などが完成した後に、その土砂を転用したものとすることができる。しかし、後円部頂の土砂を削平したときの二次堆積土であれば、もともと本墳に樹立していた埴輪が攪乱したものである。このように墳丘盛土の埴輪の由来は古墳の造営時期に大きく影響する。調査区が狭小であったため、十分に確認できたとはいえないが、今回検出した墳丘盛土に二次堆積の痕跡は認められなかつた。

3節 その他の遺構の調査（図版6）

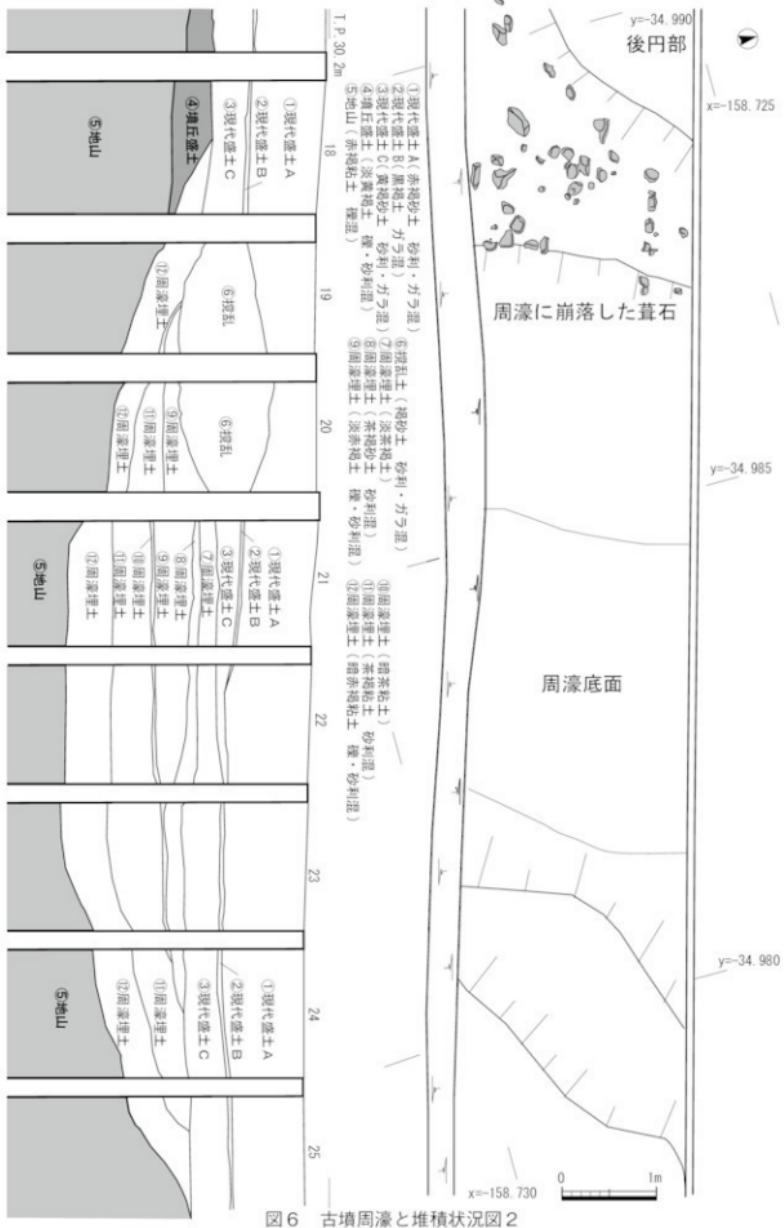
東側周濠の東で二条の溝が発見された。溝2は現況で幅約1.2m、深さ約0.7mを測る。断面はV字形の薙研掘である。埋土は上層が暗褐色粘土、下層が礫混じりの灰褐色粘土で滲水の痕跡はない。遺物に少量の埴輪が見られたが、混入と考える。

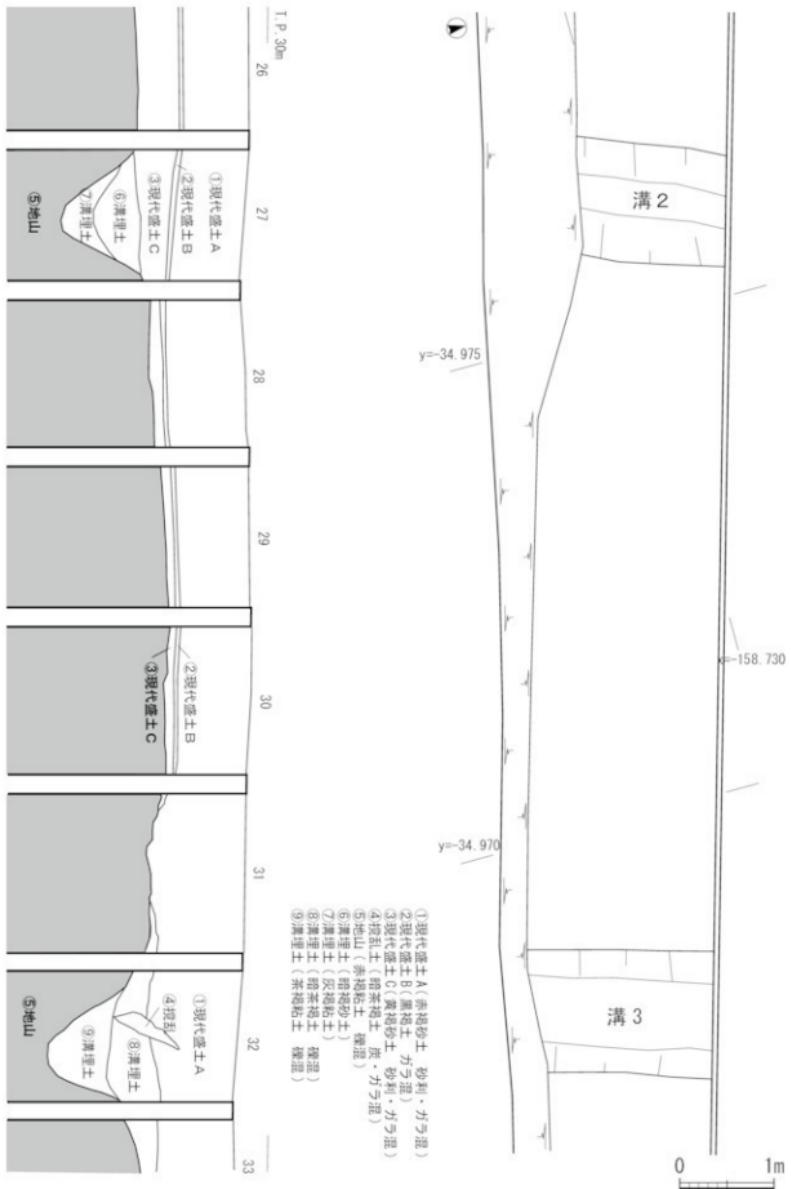
溝3は溝2の東側8.5mのところで発見された。現況で幅約1.5m、深さ約1.1mを測る。断面はV字形の薙研掘である。埋土は上層が暗茶褐色土、下層が礫混じりの茶褐色粘土で滲水の痕跡はない。下層から鎌倉時代後半の瓦器の椀・皿、土師質土器の皿・羽釜、東播系すり鉢などがまとまって発見された。二つの溝は形状が酷似し、同時期のものだろう。

調査区の東端は急激に落ち込む。人為的に地山が削られたものか、段丘崖の一部かは判然としない。調査区の外側は里道と踏み切りがあり、里道拡幅によって削られた可能性もある。



図 5 古墳周濠と堆積状況図 1





4節 出土遺物（図版7～17）

今回調査で発見された遺物には唐櫃山古墳に伴うものと、混入したものに分けられる。唐櫃山古墳に伴うものは須恵器・埴輪・葺石である。須恵器は杯と甕がある。埴輪には円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪があり、形象埴輪は笠形埴輪と盾形埴輪がある。その他、形状不明の線刻埴輪がある。いずれも、小破片である。

唐櫃山古墳の周濠や埴輪上に混入したものには旧石器時代のサヌカイト製石核・剥片、古代の土師器、中世の土師質土器・瓦器・瓦質土器・陶器など、近世の土師質土器・染付磁器・瓦・石製品などがある。以下、年代ごとに記述する。

a 旧石器時代の遺物（図版14上）

旧石器時代の遺物にはサヌカイト製石核・剥片がある。これまでの付近の調査でも石器製作に伴う石核や剥片などが散在的に発見されており、縄紋石器や弥生石器も伴うことから、生活痕跡は旧石器時代に限らない。今回発見された剥片などが厳密に何時代に属するのか明確ではないが、後期旧石器時代のナイフ形石器の素材となる翼状剥片を分離した残核を二点抽出することができた。平成13年度の調査でもナイフ形石器・翼状剥片・クサビ形石器などが発見されている。

一点は長さ5.5cm、幅6.2cm、厚さ2.1cmで、自然面を一面残す三角形である。長辺に翼状剥片を剥ぎ取ったと思われるあとがある（1）。もう一点は長さ7.0cm、幅5.2cm、厚さ1.3cmで、やはり自然面を一面残す三角形

である。長辺に翼状剥片を剥ぎ取ったと思われるあとがある（2）。

いずれも古墳の東周濠から発見された。二上山の石材だろう。

b 唐櫃山古墳に伴う遺物

唐櫃山古墳に伴う遺物は須恵器・埴輪・葺石である。葺石については第Ⅲ章に詳述する。

須恵器には杯と甕がある（図版14下）。杯は小片で、口縁部が失われており、蓋か身か判然としない。したがって、唐櫃山古墳の造営時期を厳密にする資

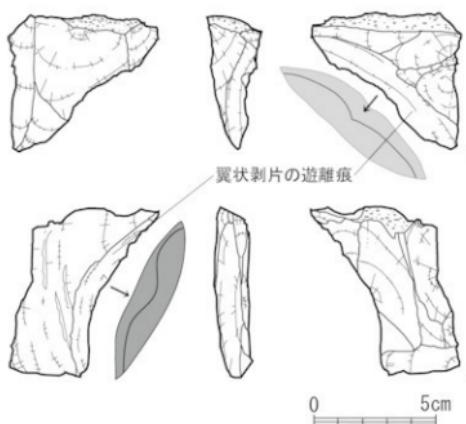


図8 サヌカイト製石核（1/2）

料にはなりえなかった。500年代以降に口径が大型化する以前のものとしかわからない。外面は丁寧に回転ヘラ削りするものの、焼成は甘く、乳白色である。東側周濠から発見された(3)。

東側周濠斜面のずり落ちた葺石の隙間に須恵器甕の破片が散在していた。同一個体の下半部の細片で12点に分かれる(4)。中型の甕で厚さは1cm程度、外面は平行タタキのあと、ハケ目調整し、内面は青海波紋のアテ具痕跡が明瞭に残る。焼成はよく、青灰白色である。

埴輪は、大半が周濠から出土し、樹立位置が確認されるものはない(図版7~13)。このほか、墳丘盛土出土のものがあり、これは唐櫃山古墳造営以前のものである可能性が高い。発見された埴輪は円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪があり、形象埴輪は笠形埴輪と盾形埴輪がある。その他、形状不明の線刻埴輪がある。

唐櫃山古墳に樹立していたと思われる周濠・表土から発見された埴輪はいずれも小破片で、ほとんど接合できなかった。須恵質と土師質があり、須恵質が目立つ。

円筒埴輪の口縁部は直立するもの、やや外傾するものがある(5~22)。口縁端部はつよく横ナデして平らに作り出す。口縁部外面は直上まで横ハケするものが大半で、斜めハケ調整が明瞭に残るもの(6・18)、刷り消すものもある(5・8)。内面も横ハケのもの、斜めハケのもの、ナデ消すものがある。内面に指押さえの圧痕が明瞭に残るものもある(6・18)。

口径を明瞭にできる個体はなく、厚みは概して1cmに満たない。中型・小型品だとわかる。

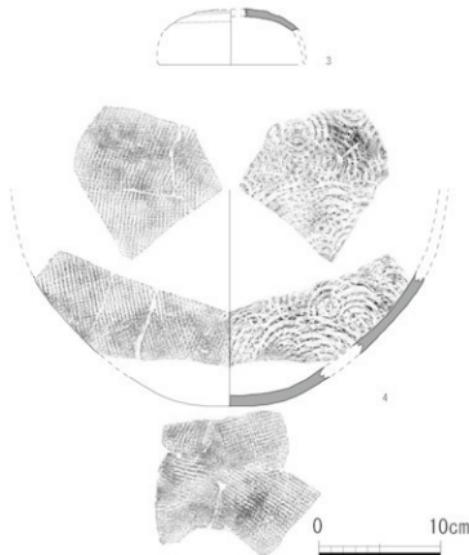


図9 周濠出土須恵器

これに対し、厚みが1.5cm程度に及ぶものが少量あった。ひとつは口縁端部外面を約2.5cm幅の帯状に厚くするもので、その直下は細かい横ハケがある(22)。もうひとつは口縁端部がやや丸みを帯びて直立する(20)。内外面共に摩滅が著しく調整は不明だが、第一突帯までの幅が8.1cmである。これらはいずれも市野山古墳外堤から発見された大型の円筒埴輪に共通する特徴である。2点は表土から発見されたもので、混入品である可能性、唐櫃山古墳と市野山古墳が共通する埴輪窯から供給されていた可能性がある。

体部は外面を強く横ハケし、断面形が台形の低い突帯を張り付けする(23)~(52)。外面の横ハケは部分的

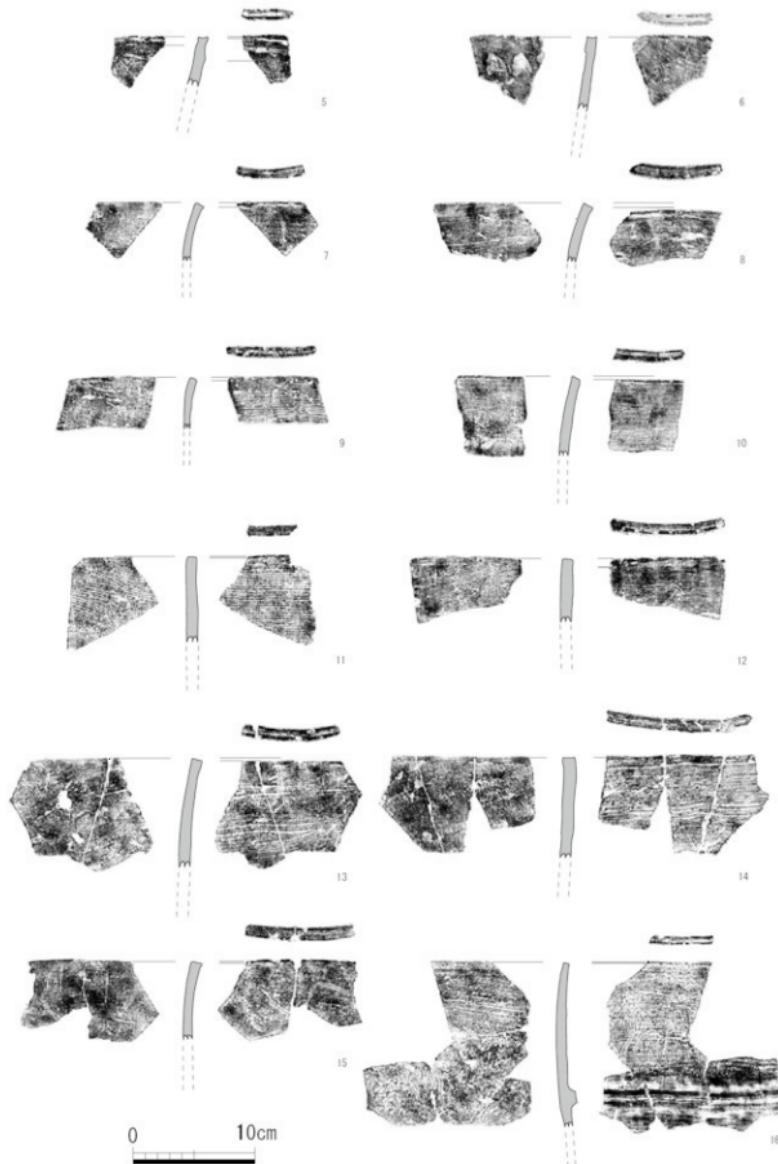


図10 円筒埴輪 1

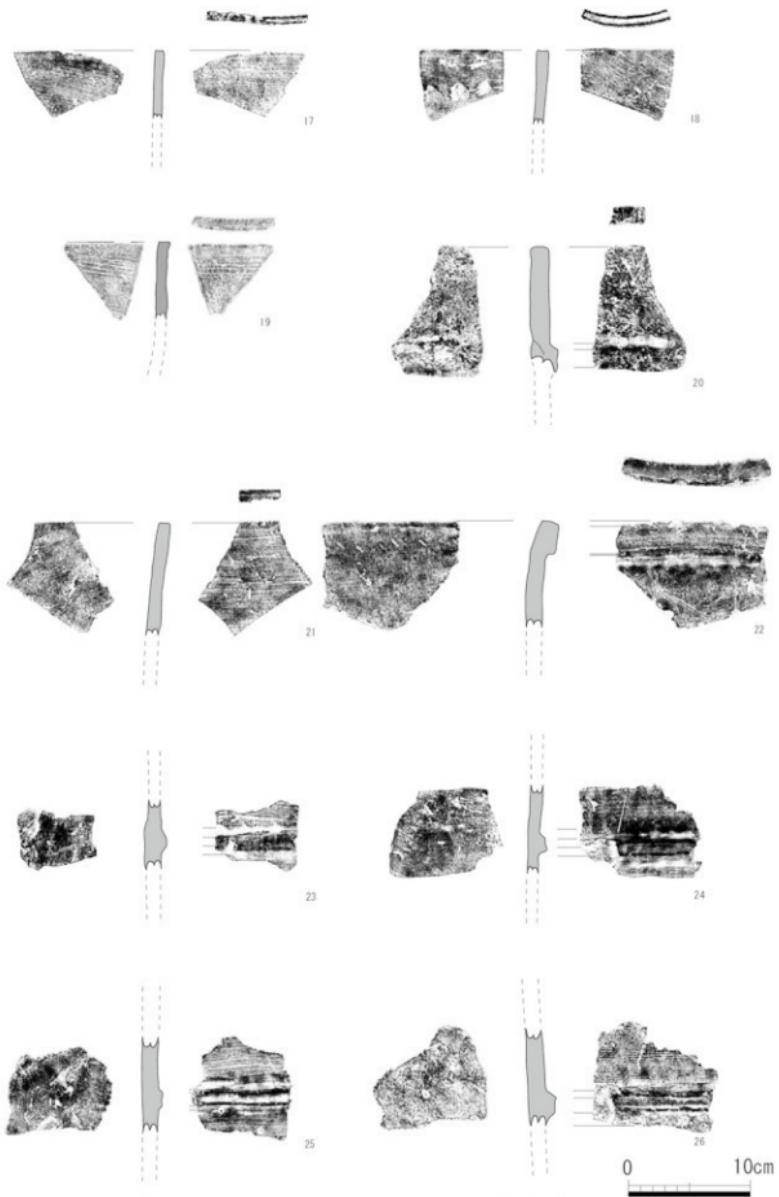


図11 円筒埴輪2

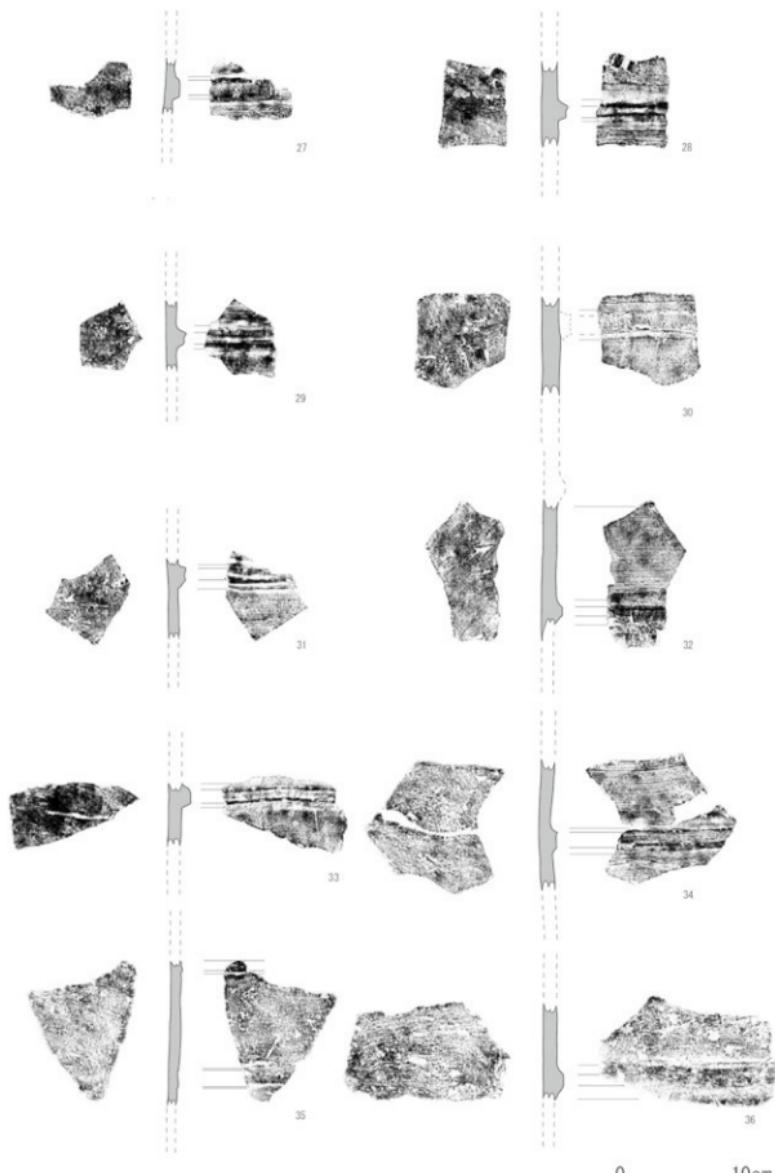


図12 円筒埴輪3

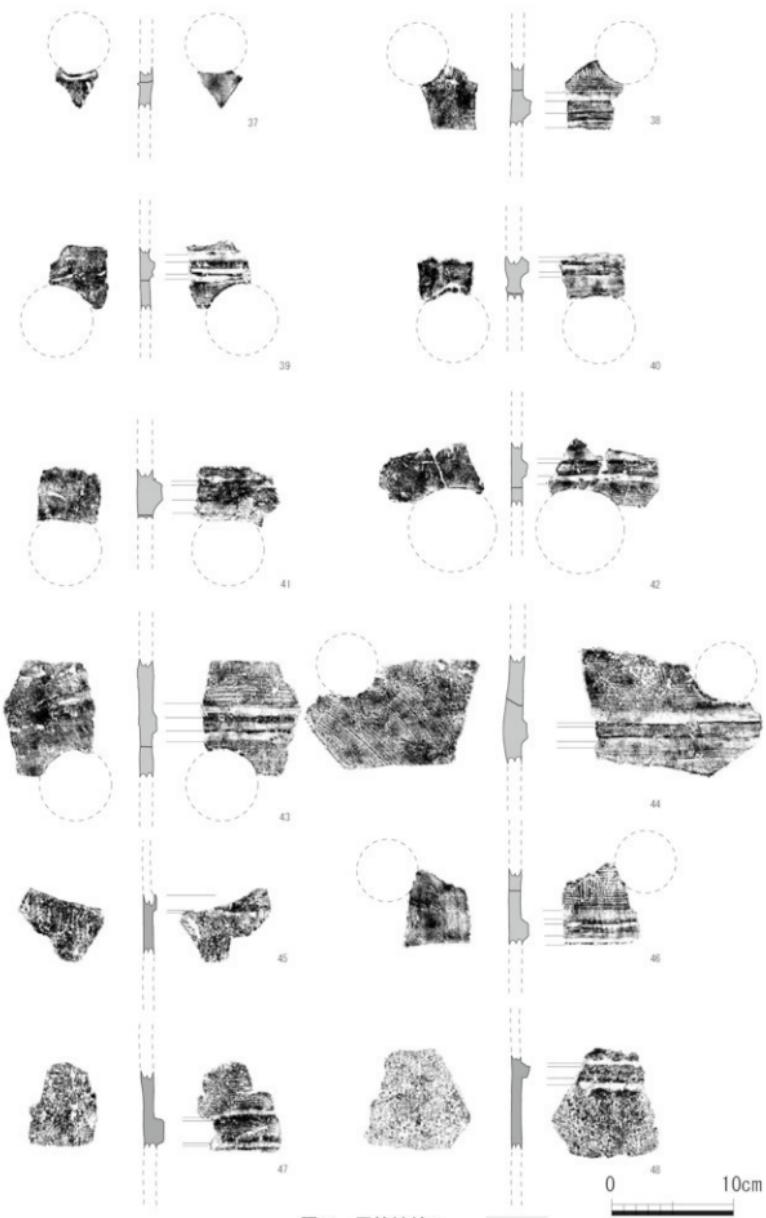


図13 円筒埴輪4

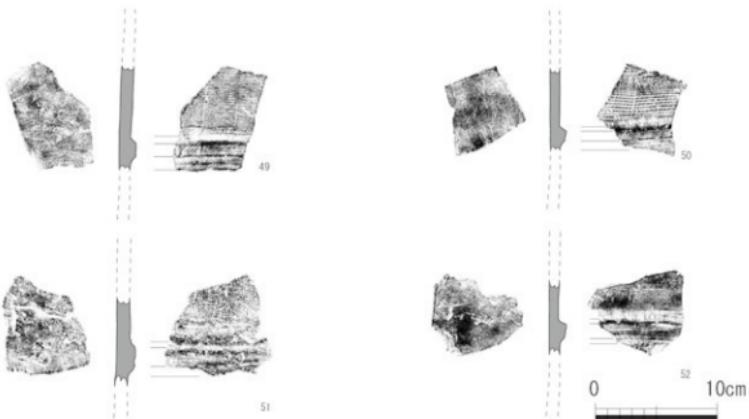


図14 円筒埴輪5

に一次調整の縦ハケ・斜めハケの痕跡を残すものが多い。内面は下から斜め上方に指ナデの痕跡が明瞭に残るものが多いため、厚さは1cmに満たないもの、1.5cmに近いものがあり、これは底部に近いか、口縁部に近いかの差によるものだろう。また、体部の破片には朝顔形埴輪・形象埴輪などを含む可能性がある。突帯の幅がわかるものは芯から芯までの長さが約9.0cmを測る(35)。透かし孔はすべて円形で、鋭くヘラで削りとられる。直径が明瞭な破片はなかったが、7cm程度だろう。野焼きによる黒斑をもつ埴輪が一点見られ、混入とおもわれる(48)。

底部は直立するもの、やや内傾するものがあり、端部は平らでやや丸みを帯びる(53)～(77)。多くの個体に内反りがあり、乾燥時の自重によるゆがみだろう。外面は横ハケ仕上げするもの、縦ハケのままのもの、無調整のもの、板状工具の圧痕が残るものがある。ただし、外面の横ハケは体部・口縁部の横ハケと明らかに原体の違いが見られる粗いもので、一次調整用のハケだろう(71)・(55)・(74)・(76)。内面は下から斜め上方に指ナデの痕跡が明瞭に残るものが多いため、厚さは2cm前後で、底径が推測できる資料は少なく、25～30cmである。底部破片も朝顔形埴輪や形象埴輪を含む可能性がある。

底部の端面には蘿や小枝などの植物圧痕が残され、小石・砂粒の圧痕がつくものはない。これは地面ではなく、台の上で乾燥させ、台との密着を緩衝材で防いだものである。埴輪工人の製作技術の特徴を示すとおもわれる。また、多くの破片は底面から約10cmの第一突帯直下で破損しており、この位置まで墳丘に埋めていたと推測される。

以上、円筒埴輪の特徴を示す。色調は多彩だが、暗褐色の須恵質埴輪が目立ち、土師質のものは明褐色、赤褐色である。青灰色や灰白色のものはない。形態は底径25～30cm程度、口縁部の器厚1cm以下の小型・中型埴輪が大半をしめる。外面調整は一次調整として縦ハケ、あるいは斜めハケを目的の粗いハケ工具で行ったあと、同一工具かやや目の細かいハケ工具で、二次調整と

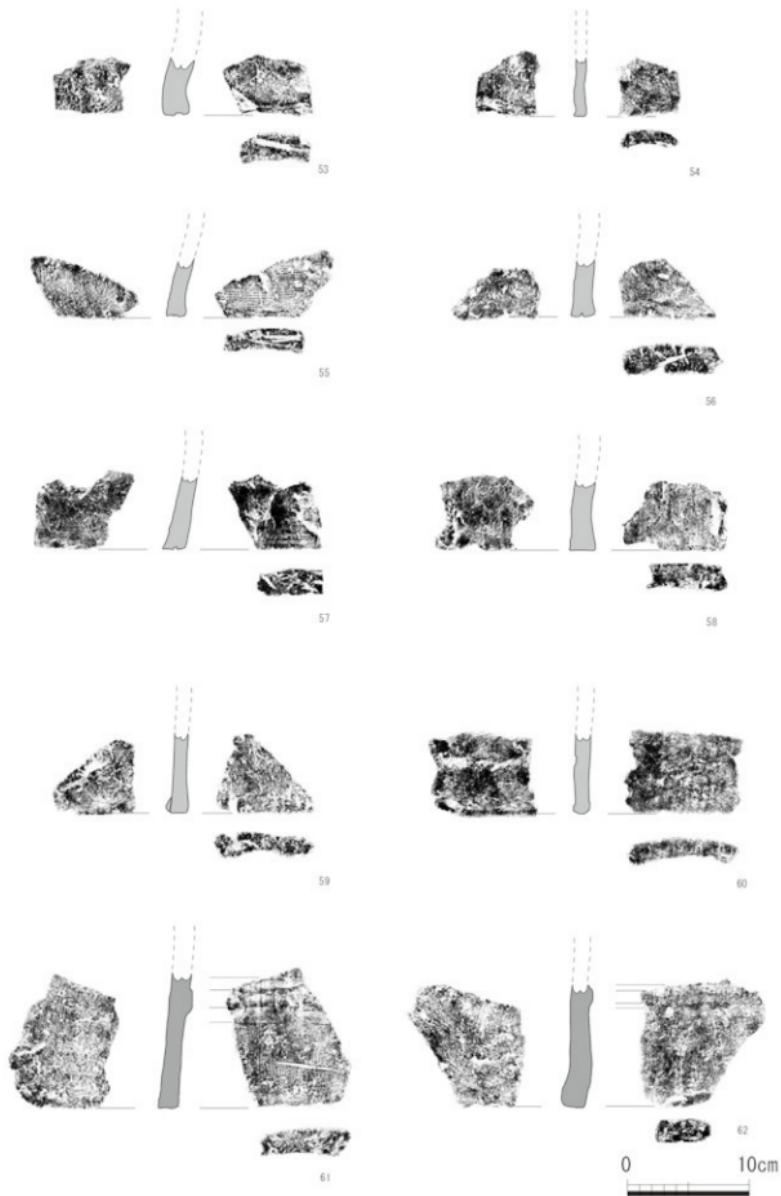


図15 円筒埴輪6

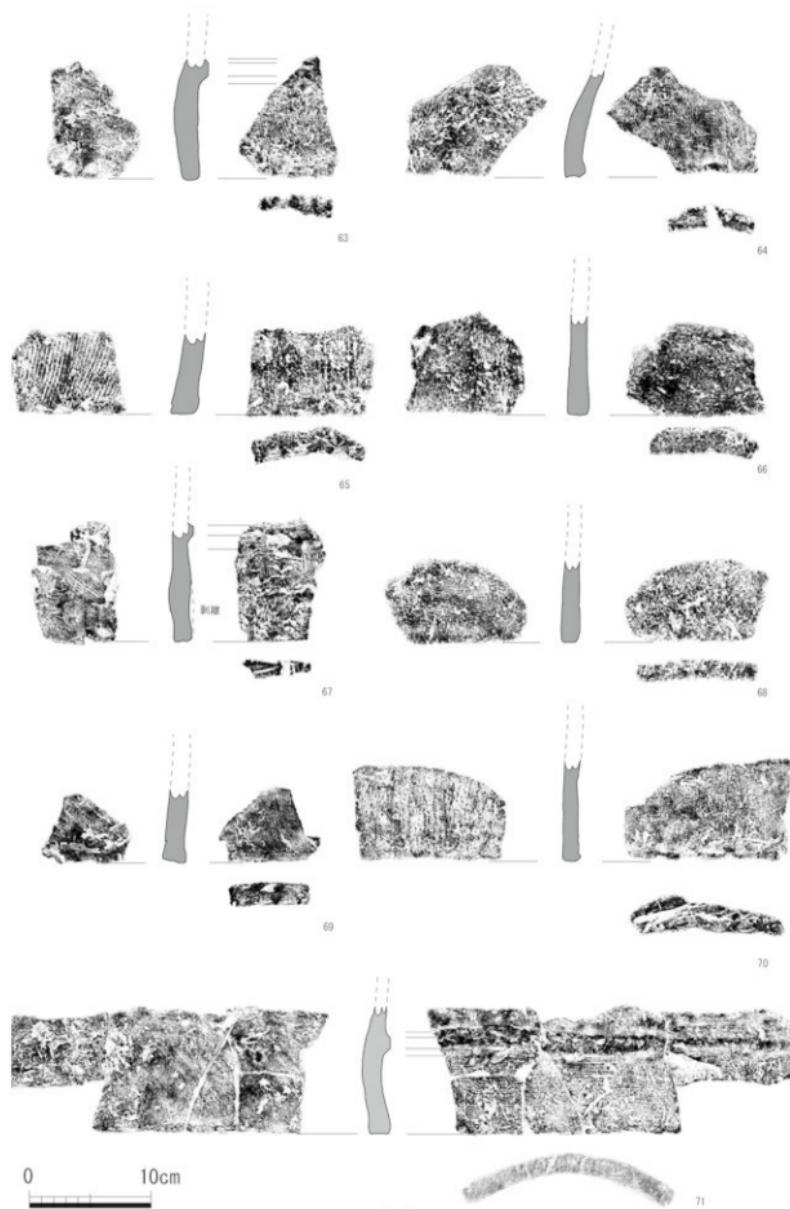


図16 円筒埴輪7

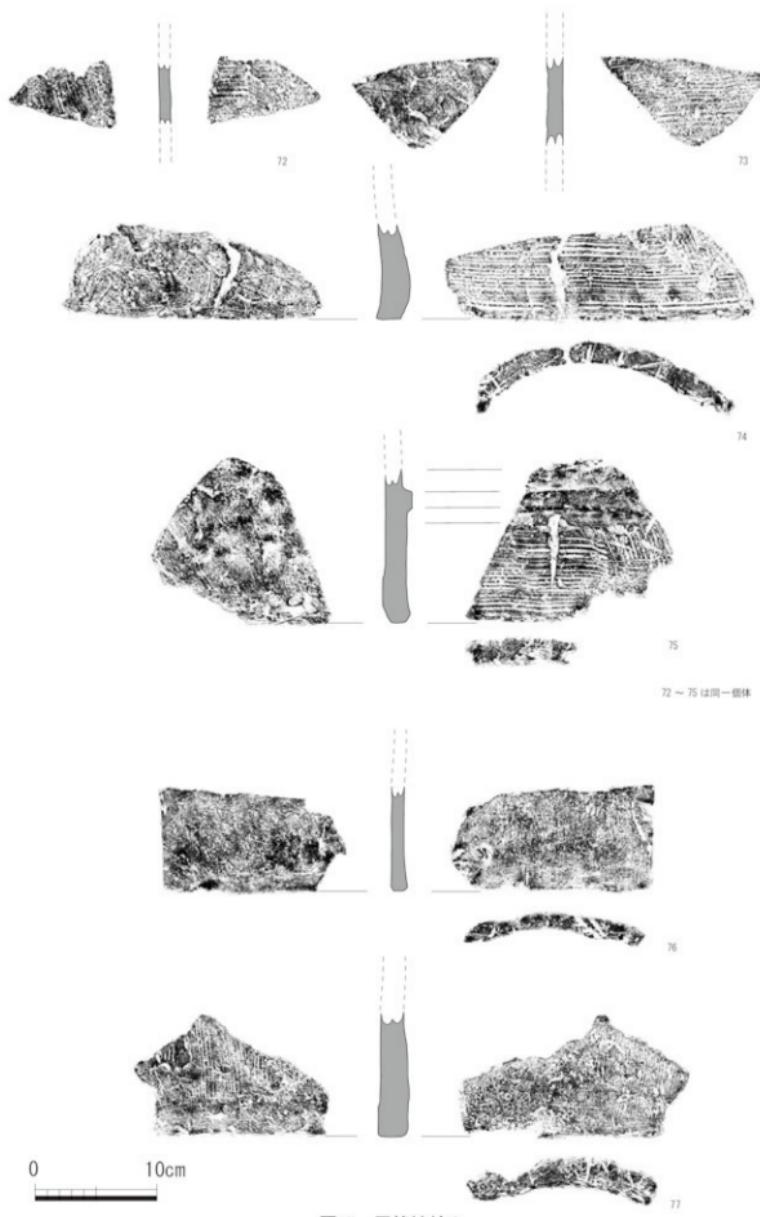


図17 円筒埴輪8

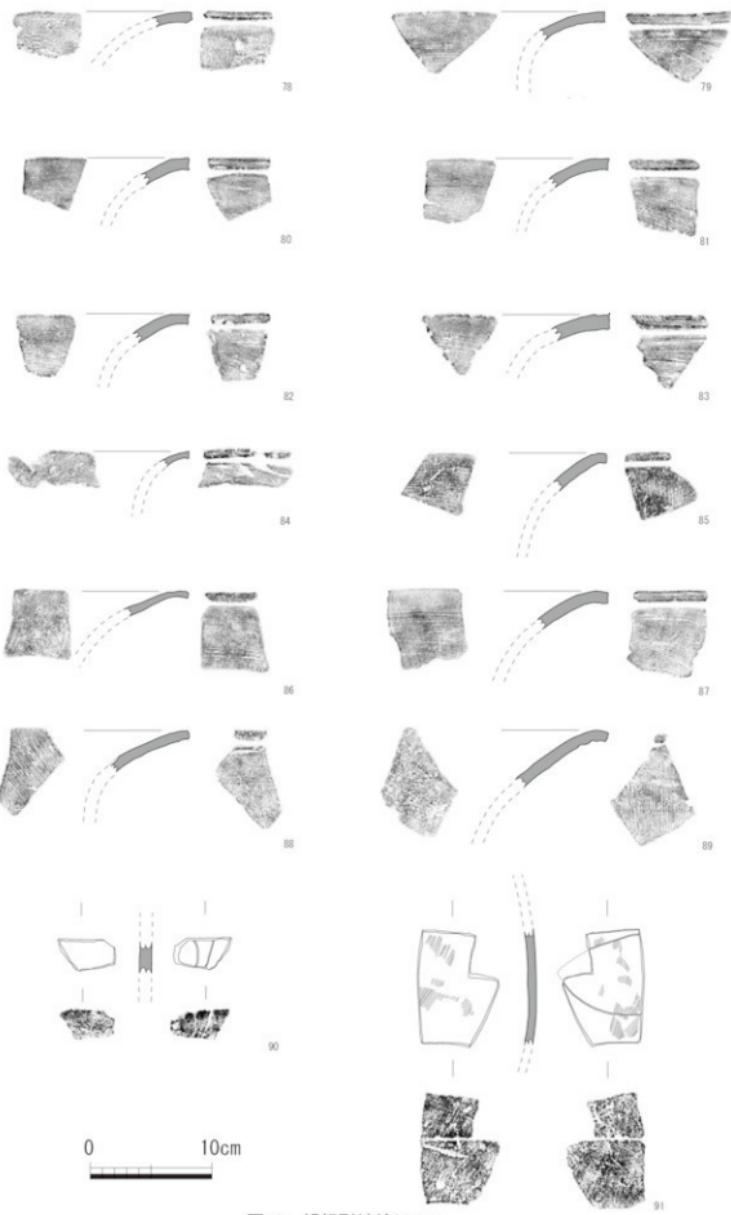


図18 朝顔形埴輪ほか1

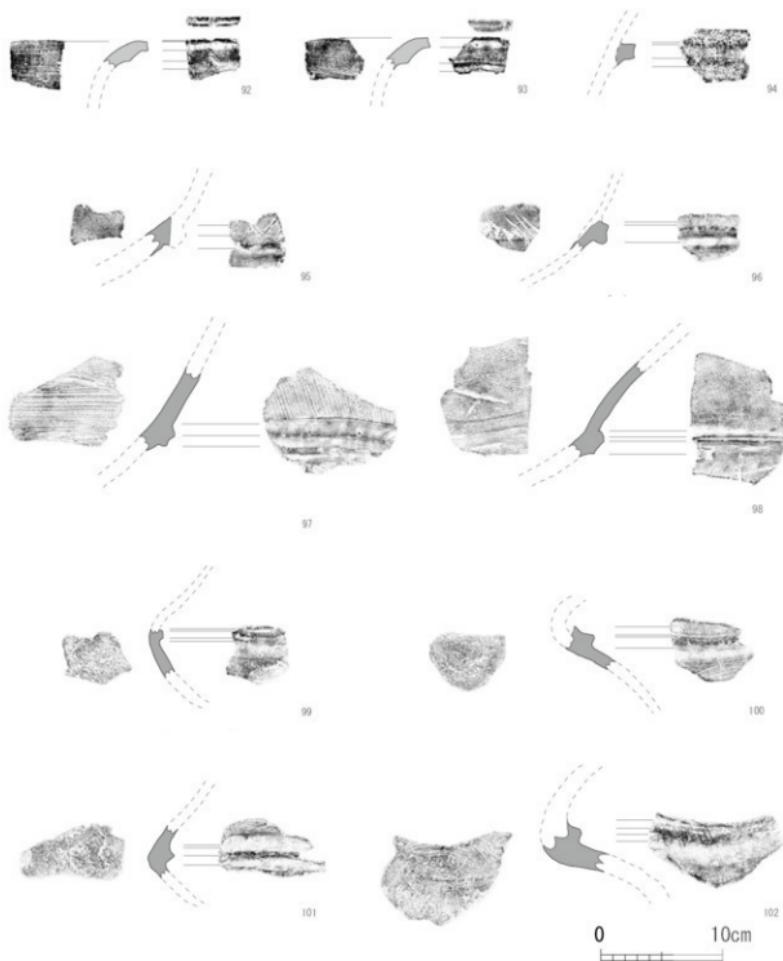


図19 朝顔形埴輪ほか2

して横ハケを行う。横ハケは雑で、一次調整が部分的に残る。内面は一次調整の縦ハケ、あるいは斜めハケを行ったままのもの、粗くナデ仕上げするものがある。突帯は貼り付けられた低い台形である。透かし穴は円形である。ただし、今回の資料は破片ばかりで、口径や横ハケのストロークの長さ、段ごとの静止痕の傾きのバラつきなどは十分に検討できなかった。

朝顔形埴輪は複合口縁部とくびれ部のみ明瞭にできた(図版13)。体部・底部は円筒埴輪と区

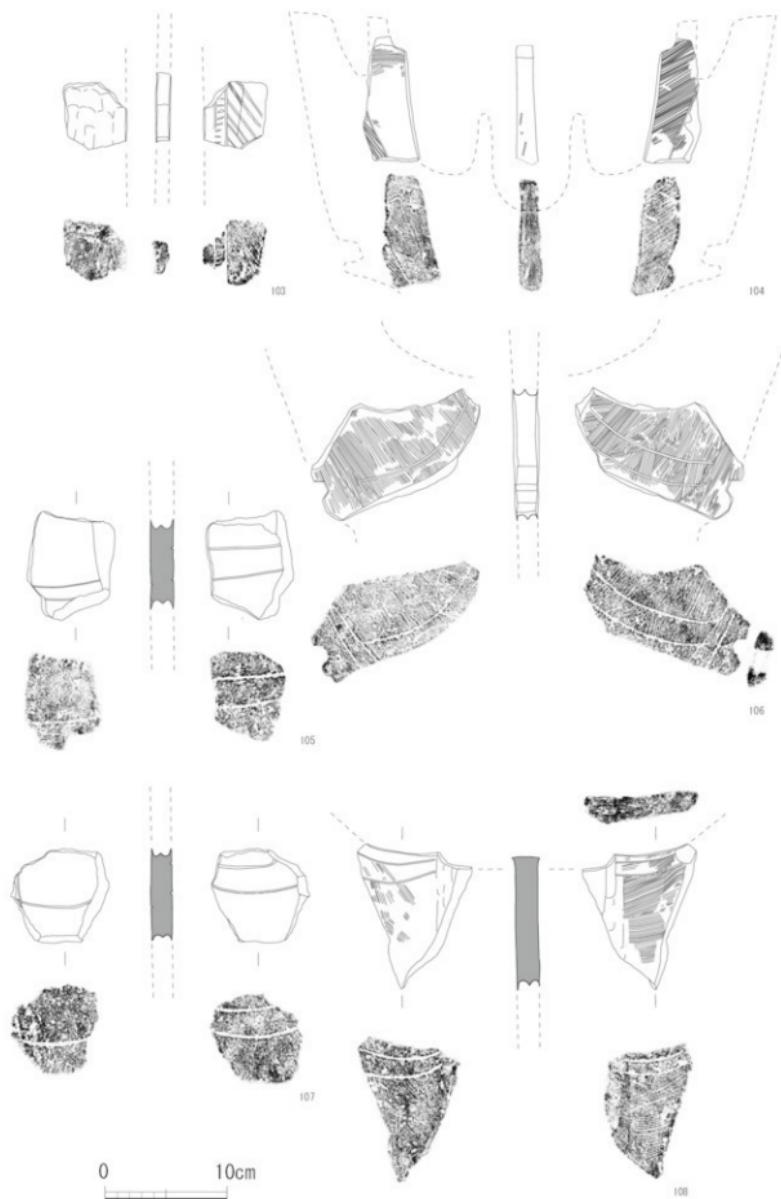


图20 形象埴輪

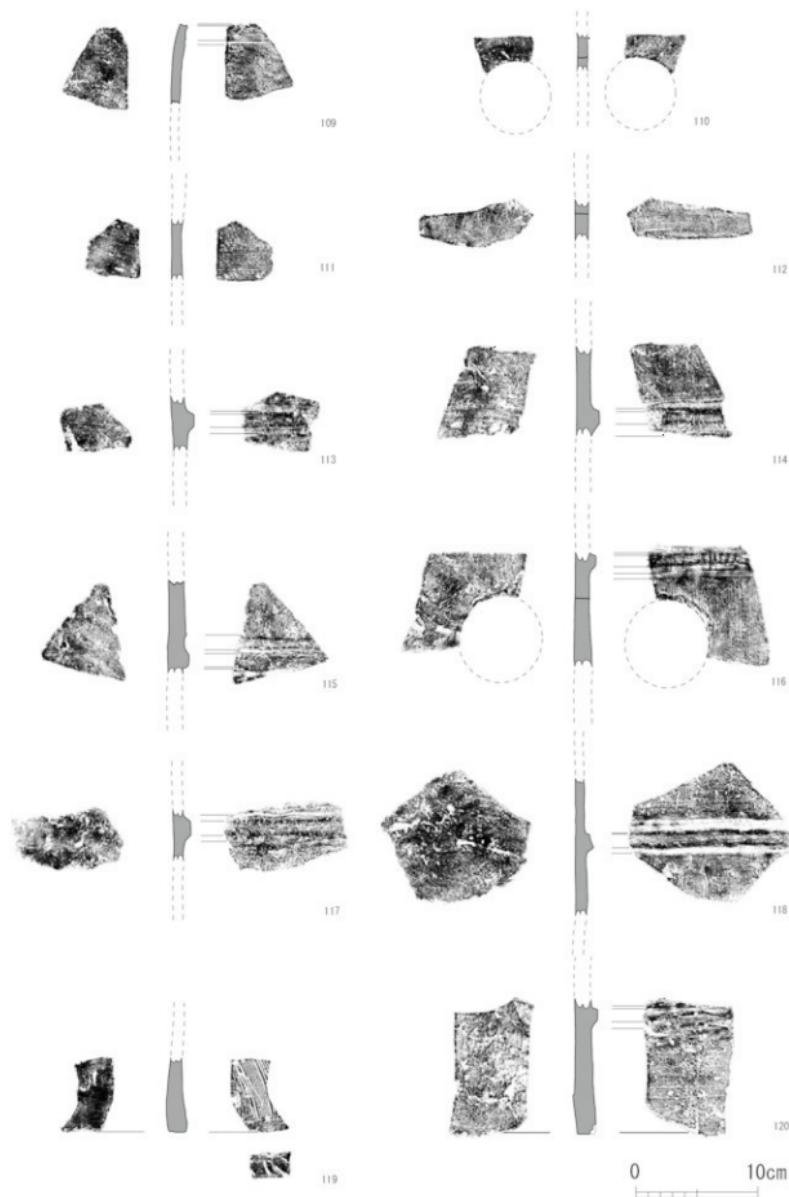


図21 墳丘盛土内出土埴輪

別できていない。口縁部は強く外反し、端部は平らでナデ仕上げする（78）～（89）・（92）・（93）。内外面とも、横ハケ仕上げするもの、斜めハケ、縦ハケを残すものもある。口径を明瞭にできない小片ばかりで、厚みは1cmを超えるものが大半である。つくりは円筒埴輪口縁部にほぼ共通する。

これに対し、口縁端部外面を強く横ナデして段をなし、厚みが1cmをこえるものがある（92）・（93）。図化した2個体は東側周濠の同じ地区から発見されており、同一個体の可能性がある。この2片は笠形埴輪の笠の轍かもしれない。

複合口縁部は口縁部の中央に突帯を貼り付けたものと（94）・（97）、突帯の部分で上半と下半を接合するものがある（95）・（96）・（98）。接合面がわかるものは、ヘラで刻みを付ける。外面の上半は縦ハケ、あるいは斜めハケ仕上げである。屈曲部には台形の突帯を貼り付けるもの（99）・（100）、三角形の突帯を貼り付けるものがある（101）・（102）。

棒状の工具で外面に線刻を施した埴輪は内外面ともにハケ目調整のあとスリ消し、深く鋭く線刻する（90）・（91）。緩やかな反りがあり、朝顔形埴輪の肩部かもしれない。

形象埴輪は盾形埴輪と笠形埴輪がある（図版12）。いずれも、土師質で明赤褐色の小片である。盾形埴輪は縁部で、表面には鋸歯紋と皮綴の表現が棒状の工具で線刻される（103）。裏面は丁寧にナデ仕上げされる。厚さは1.1cmと薄く、反りはない。

笠形埴輪は立飾りのみ5点発見された（104）～（108）。いずれも、厚さ2.0cmの粘土板を形成後、細かくハケ目調整し、棒状工具で両面に共通する二条一組の弧紋を線刻する。ただし、線刻は粗く、紋様は両面で均整が取れていない。上鰭先端の端面には刺突がみられ、羽飾りを刺した可能性もある（104）。

c 墳丘盛土の埴輪（図版10下）

唐櫃山古墳の埴丘盛土から発見された埴輪も小破片ばかりで、接合はできなかった。須恵質と土師質があり、土師質が目立つ。

円筒埴輪の口縁部は直立気味に外反する（109）。口縁端部とその外面を横ナデし、沈線をいれる。この沈線は突帯間隔設定技法に伴う割付け線だろうか。厚さは0.8cmである。

体部の破片には台形の低い突帯が伴うもの、円形の透かし孔が伴うものがある。横ハケの原体は周濠出土のものとくらべ、概してハケ目が細かく浅い。また、一次調整の縦ハケや斜めハケも丁寧にスリ消されている。縦ハケが残り、横ハケが省略されたものもあり、それは底部に近い部分だろう（116）。

底部は直立し、端面は平たい。第一段目の突帯がわかるものは突帯までの長さが9.5cmを測る（120）。底部端まで横ハケされるもの（120）と、縦ハケのもの（119）がある。埴丘盛土出土埴輪は周濠出土埴輪と比べ、明らかに古い型式のものは確認されない。

以上、発見された埴輪の特徴はこれまでの調査成果とおおよそ符合するものである。

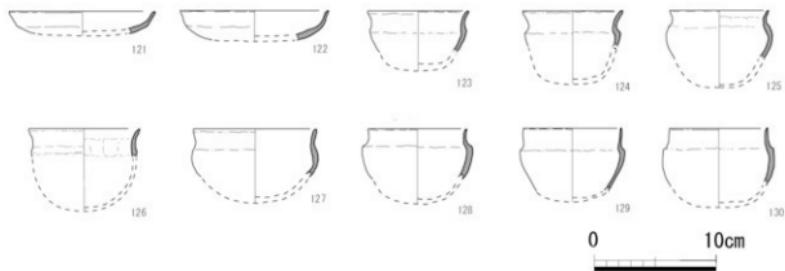


図22 古代の遺物

d 古代の遺物（図版16上）

古代の遺物には飛鳥時代の土師器小壺・杯がある（121）～（130）。いずれも小型の精製品で東側周濠の最下層から発見された。この時代に一括して棄てられた祭祀土器の可能性もあるが、いずれも小破片である。

杯は口縁部外面を横ナデし、端部を開き氣味に丸く仕上げる（121）・（122）。体部の外面は無調整で内面は丁寧にナデ仕上げされる。口径は12cm程度である。色調は暗赤褐色で、在地の製作と思われる。

小壺は口縁部外面を強く横ナデし、やや外反させるものと（123）～（127）、ほぼ直立させるものがある（128）～（130）。いずれも、口縁端部は尖り氣味に丸く仕上げる。体部は内外面ともに指揮さえの痕跡がわずかに残り、粗くナデ消されている。口径は8～10cm程度である。色調は杯同様にすべて暗赤褐色で、在地の製作と思われる。

その他、飛鳥～奈良時代のものと思われる須恵器壺・甕などの小片が表土などからわずかに見つかっている。後世に周辺から混入したものだろう。

e 中世の遺物（図版16下・17上）

中世の遺物には、土師質土器・瓦器・瓦質土器・陶器がある。大半は溝3の最下層からまとめて発見された。その他の遺物は表土や周濠埋土の上層などから発見されたもので、その量は多くない。

土師質土器には皿・羽釜・壺がある。皿は直径7.5～10.1cm、口縁部を外反させ、外面端部を強く横ナデする（131）・（133）・（136）。内面もナデ仕上げし、外面は指揮さえの痕跡が明瞭に残る。すべて、淡黄褐色で在地産と考える。

羽釜は大型（147）と中型（144）～（146）がある。いずれも小片で口径は推定で図化した。口縁部は緩やかに内傾させ、端部を丸く仕上げる。ツバも端部を丸く仕上げ、貼り付けである。ツバの下半部は煤ける。口縁部に穿孔のあるもの（144）、口縁端部に刻みのあるものもある（145）。

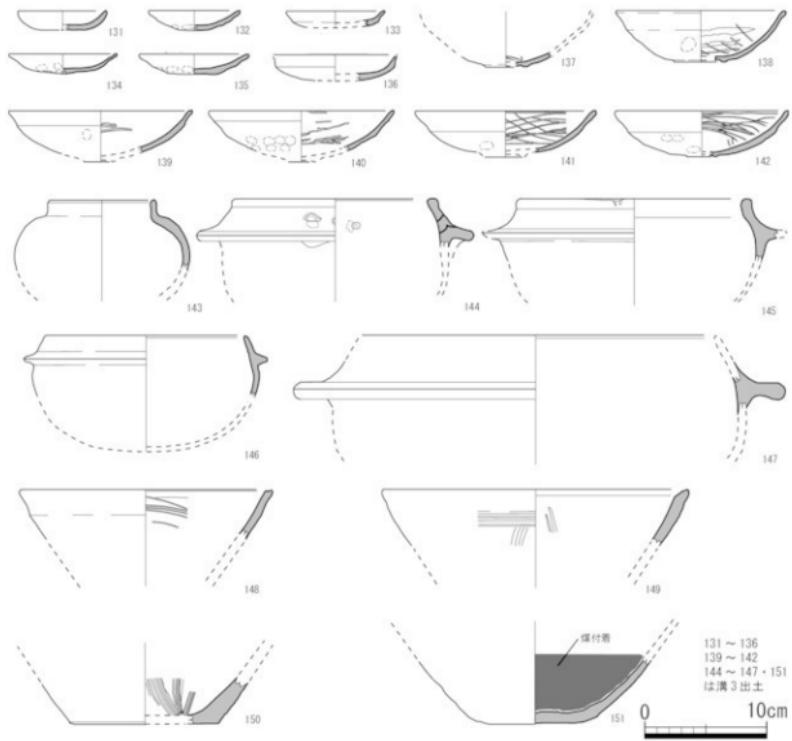


図23 中世の遺物

すべて赤褐色で、溝3からみつかった。

壺は口縁部がほぼ直立し、端部は丸く仕上げる（143）。口径は8.8cmを測る。黒褐色で内外面とも、ナデ仕上げされる。

瓦器には碗と皿がある。瓦器皿は灰白色、すべて小片である。直径7cm程度で、口縁部を外反させ、端部は丸く仕上げる（132）・（134）・（135）。端部外面は指ナデし、体部は指押さえの痕跡が粗く残る。内面は丁寧に磨かれる。溝巻き状か格子状の暗紋がある。底部のわかるものは形骸化した貼り付け高台が残る。表土から見つかったもの（137）・（138）、溝3からみつかったものがあり（139）～（142）、いずれも鎌倉時代中頃～後半のものだろう。

瓦質土器には鉢とすり鉢がある。鉢は口縁端部が平らで、内面を斜め方向にヘラ磨きする（148）。

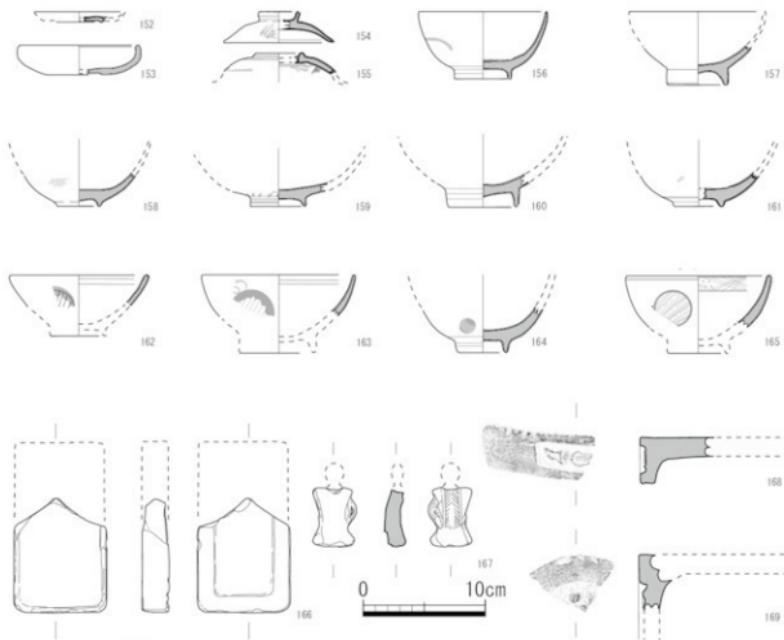


図24 近世の遺物

外面は口縁端部を横方向にあらくナデ仕上げする。すり鉢は口縁端部を尖り気味にし、内外面にカキ目がある（149）。内面は摩滅がみられず、使い込まれたかどうかはわからない。

陶器すり鉢は底部の小片で、内面に放射状の粗い擂目がある（150）。外面は無調整である。備前焼だろう。内面の擂目は摩滅し、よく使い込まれている。

東播系すり鉢も底部の小片である。破損した後、内面に二次的な火をうけ、真っ黒に煤ける（151）。外面は横ナデし、底部は無調整で平らである。溝3の出土で、古物の再利用だろう。

f 近世の遺物（図版17）

近世の遺物には土師質土器・染付磁器・陶器・瓦・石製品などがある。いずれも、表土や東側周濠埋土上層から発見された。

土師質土器皿はいずれも灯明皿である。一点はいわゆる柿渋釉と呼ばれる褐釉がかかる（152）。他の一点は直径9.8cm、器高2.4cmを測る（153）。口縁端部は直立し、端部の一部に灯芯による煤が付着する。いずれも、幕末から明治のものだろう。

染付磁器はいずれも肥前磁器で碗と蓋がある。蓋は、一点が外面に草花紋、内面に沈線があり、

口縁端部は尖り気味となる（154）。もう一点は内外面に紋様を描くものの、全形はわからない小片である。

碗は「くらわんか」などと呼ばれる波佐見焼系で、外面に雪輪紋・車輪紋・手毬紋などがある（156）・（158）～（165）。見込みの断面は厚く、1cmをこえる。底径は3.5～5.5cmを測る。見込みの内面を蛇目釉剥ぎするものと（156）・（161）、そうでないものがある（160）・（164）。内外面にこんなにやく印判による草花紋を施す古式のものもある（158）。

その他、肥前陶器の碗がある（157）。底径4.7cm、高台高1.2cmを測り、内外面ともに透明釉が掛けられ、淡乳白色である。高台置付の釉を丁寧に削り取る。

瓦には軒瓦・平瓦などがある。東側周濠埋土の上層から発見された。軒平瓦には唐草紋が（168）、軒丸瓦には巴紋がある（169）。いずれも小ぶりで外区が厚く、幕末以降のものだろう。

石製品には硯がある（図版15上）。海部を欠損するが、陸部はよく磨り減っており、墨のあとが残る。幅7.5cm、厚2.2cmを測る。灰白色で乳白色の砂粒を多く含み、表面の風化が著しい（166）。灰白色の硯といえば、対馬の若田石製の頁岩の硯が中世以降に広範な流通をみせるという。本硯がそれに該当するのかは未確認である。また、側面と裏面に黒褐色の付着物がわずかに残り、もともと黒漆を塗布して仕上げられたものかもしれない。平成13年度の調査でもよく似た硯が周濠埋土上面から発見され、中世のものとして報告されている。

土製品にはいわゆる「伏見人形」・「住吉人形」などと呼ばれる翁像がある（167）。頭部と脚部、左腕を欠損する。もともと、胡坐座りで左手をあげ、男女一対となるものか。夫婦円満を祈願する縁起物として、現在でも類品が住吉大社などで売られている。

その他、製作年代が不明の鋳型片がある（図版15下）。真土と外枠压痕の一部が残る。真土の表面は灰白色に焼けており、使用されたことがわかる。表土から発見された（170）。近隣の御曹司塚古墳周濠から平安時代末の大量の瓦器椀とともに梵鐘鋳型が発見されており、周辺に鋳物工人がいたのか、土師寺などの改修時に出吹きがあったのかもしれない。

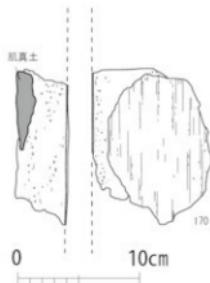


図25 不明鋳型

第Ⅲ章 唐櫃山古墳周濠出土石材とその採石地

唐櫃山古墳前方部の周濠から出土した石材の石種・粒径・粒形について観察した。また、これら石材の粒形と岩相をもとに当古墳の近隣地で同様の石が分布する地を求めた。石材の粒径と粒形、石種の特徴、推定される石材の採石地について述べる(図26)。石材の採石について表面が滑らかで、川原石様の石は川原で採石されたとし、鋭い角がみられる割石は露岩を割って剥がした石とした。

a 石材の粒径と粒形

観察した石材67個の粒径と粒形について述べる。石材の長径5cm以上10cm未満が2個、10cm以上20cm未満が46個、20cm以上30cm未満が19個で、10cm以上20cm未満の石が約7割を占めている。粒形は角が5個、亜角が40個、亜円が15個、円が2個で、割石が5個である。亜角の石が約6割を占めている。

b 石材の特徴

各石材の特徴について述べる(図版18・19)。黒雲母花崗岩・斑楓岩・片麻状アブライト・片麻状黒雲母花崗岩・流紋岩・安山岩・輝石安山岩A・輝石安山岩B・輝石安山岩(サヌカイト)・橄欖石安山岩・流紋岩質溶結凝灰岩・流紋岩質火山疊凝灰岩A・流紋岩質火山疊凝灰岩B・疊岩・礫質砂岩・砂岩の岩相については観察良好な一個について述べる。

黒雲母花崗岩 色は灰白色、粒形は亜角が多く、亜円、円である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2~6mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が2~8mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1~5mm、量がごくごく僅かである。

斑楓岩 色は灰白色、暗灰緑色で、粒形が角である。長石・角閃石・輝石が噛み合っている。長石は灰白色、粒径が2~10mm、量が多い。角閃石は黒色、柱状で、粒径が2~6mm、量が僅かである。輝石は暗灰緑色、粒径が1~5mm、量が多い。

片麻状アブライト 色は淡茶色で、割石、亜円疊である。片麻状を呈し、片麻状の方向に石英がレンズ状をなす。石英と長石が噛み合っている。石英は赤茶色透明、粒径が1~30mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が2~6mm、量が多い。

片麻状黒雲母花崗岩 色は灰色で、顕著な片麻状を呈する。粒形が亜角である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は淡茶色透明、粒径が2~8mm、量が僅かである。長石は灰白色、粒径が8~40mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、レンズ状をなし、長径が3~30mm、量が僅かである。

流紋岩 色は淡青灰色、粒形が亜角である。石英の斑晶が目立つ。斑晶鉱物は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明、粒径が0.5~4mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が0.5~1mm、

量が中である。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1～2mm、量がごく僅かである。石基はガラス質である。

安山岩 色は淡茶灰色、粒形が亜角である。斑晶鉱物は長石と黒雲母である。長石は灰白色、粒径が1～8mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1～4mm、量がごく僅かである。石基はやや粒状、ガラス質である。

輝石安山岩A 色は灰色で、割石である。板状節理が顯著である。斑晶鉱物は長石と輝石である。長石は灰白色、短柱状で、粒径が2～6mm、量が僅かである。輝石は黒色、柱状で、粒径が1～4mm、量が僅かである。石基はガラス質である。

輝石安山岩B 色は淡茶灰色、粒形が角・亜角である。流理方向に鉱物粒が並ぶ。輝石は黒色、柱状で、粒径が0.5～1mm、量が僅かである。石基はガラス質、やや粒状である。

輝石安山岩（サヌカイト） 色は黒色、粒形が亜角である。表面には爪痕状の風化がみられる。石基はガラス質である。

橄欖石安山岩 色は灰色で、割石や亜角礫・亜円礫である。板状節理が顯著である。斑晶鉱物は長石・輝石・橄欖石である。長石は褐色、短柱状、粒径が1～3mm、量が僅かである。輝石は黒色、粒径が0.5～2mm、量が中である。橄欖石は褐色、粒状で、粒径が1～1.5mm、量が僅かである。石基はガラス質である。

流紋岩質溶結凝灰岩 色は暗灰色で、粒形が亜角である。ガラス質で、縞模様がある。

流紋岩質火山疊凝灰岩A 色は灰色で、粒形が亜角である。構成粒は流紋岩と石英である。流紋岩は灰色、ガラス質で、粒形が亜角、亜円、粒径が2～6mm、量が中である。石英は無色透明、粒形が1～5mm、量が多い。自形様のものが目立つ。基質はガラス質である。

流紋岩質火山疊凝灰岩B 色は灰白色で、粒形が亜角・亜円である。流紋岩の角礫が多い。流紋岩は灰色、ガラス質で、粒径が3～20mm、量が多い。基質は白色で、緻密である。

疊岩 色は灰色、淡茶褐色で、粒形が亜角、亜円である。構成粒はガラス質の流紋岩で、灰白色、暗灰色、褐色、暗灰緑色、赤茶色等と様々で、粒形が亜角、亜円、粒径が2～8mm、量が非常に多い。基質は細粒砂からなる。

疊質砂岩 色は灰色で、粒形が亜円である。後述の砂岩に前述の疊岩の礫が混ざった岩相を示す。

砂岩 色は灰色で、粒形が亜角、亜円である。構成粒は流紋岩、石英、長石である。流紋岩は黒色、青灰色、暗緑色、茶色等を呈し、粒形が亜角、亜円で、量が多い。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.5～1.5mm、量が中である。長石は灰白色、粒形が角、粒径が0.5～1.5mm、量が中である。基質は緻密である。

c 石材の採石地

唐櫃山古墳は南北に続く丘陵上に位置し、地層に稀に含まれている礫以外、石材に恵まれない

地である。地層に含まれている花崗岩類や砂岩は表面が風化している場合が多い。しかし、出土石材の表面は川原石のように滑らかである。割石は露岩を剥がした石と推定され、角に円みがあり、表面が滑らかな石は川原の石を採石したと推定される。羽曳野丘陵や玉手山丘陵には第三紀・第四紀の地層、松岳山・芝山から北側には花崗岩類、芝山の頂上から東南部にかけて橄欖石安山岩・玄武岩（芝山火山岩）、柏原市峰付近の亀の瀬に輝石安山岩（ドロコロ火山岩）、同市寺山付近に石英安山岩（寺山火山岩）、羽曳野市飛鳥の春日山に輝石安山岩（春日山火山岩）が分布する。また、閃綠岩や斑鰐岩は小規模な岩体で、柏原市横尾北方付近、松岳山付近に分布する。河川には石川、原川、大和川があり、当古墳造営時は柏原市船橋付近で石川と大和川が合流して北方に流れていた。川原石様の石材は合流地点付近で採石されていれば船橋付近となる。距離を考慮して、近距離地点である藤井寺市土師の里付近の石川の川原、柏原市国分付近の原川の川原、高井田から上流の大和川の川原を石材の採石地とする。

割石は露岩がみられる付近と推定され、橄欖石安山岩は芝山頂上部東南付近に分布する芝山火山岩、輝石安山岩Aは亀の瀬で防災工事が行われている付近の右岸にみられるドロコロ火山岩、片麻状アプライトは青谷西方の大和川岸付近が採石地と考えられる。斑鰐岩は角ばっており、表面がざらざらしていることから、谷川や山腹に分布する石と推定され、松岳山の東南斜面、あるいは横尾北方付近が採石地と推定される。黒雲母花崗岩・片麻状黒雲母花崗岩・流紋岩・流紋岩質溶結凝灰岩・流紋岩質火山礫凝灰岩AとB・礫岩・礫質砂岩・砂岩は粒形と岩相から、石川の川原にみられる石と同様である。安山岩は寺山火山岩の岩相の一部に、輝石安山岩Bと輝石安山岩（サスカイト）は春日山火山岩の岩相の一部に似ている。原川の川原に粒形と岩相が似ている石がみられる。橄欖石安山岩の礫は高井田付近の大和川にみられる。

以上の推定をもとに採石量を比較すれば、観察個数67個で、石川で約7割、原川で約9分、大和川で約1割の石材を採石しているといえる。(奥田 尚・加藤 治樹)

石 種	石 材 の 長 径 (cm)			石 材 の 粒 形				合 計
	5~9	10~19	20~29	角	亜 角	亜 円	円	
黒雲母花崗岩	1	8	2		8	2	1	11
斑鰐岩		2	2	4				4
片麻状アプライト			3			1		2 3
片麻状黒雲母花崗岩	1			1				1
流紋岩	3				3			3
安山岩	1			1				1
輝石安山岩A	1						1	1
輝石安山岩B	2	2	1	2		1		4
輝石安山岩（サスカイト）	1			1				1
橄欖石安山岩	2	3		1	2		2	5
流紋岩質溶結凝灰岩	2			2				2
流紋岩質火山礫凝灰岩A	2	1		3				3
流紋岩質火山礫凝灰岩B	3	3		4	2			6
礫岩	1	8	1	8	2			10
礫質砂岩		5			5			5
砂岩	5	2		6	1			7
合 計	2	46	19	5	40	15	2	567

図26 石材の石種とその粒径・粒形

第IV章　まとめ

1節　調査成果について

今回の調査で唐櫃山古墳後円部の埴丘の一部と東西の周濠を確認することができた。後円部の直径を約38mとすれば、周濠の幅は8~10m程度でやや狭い。深さは2m程度残されており、滯水はなく空濠だったと推定する。

古墳の北側に市野山古墳外堤・外濠があったとすれば、周濠は重なり、外堤を壊して周濠となっていた可能性がある。古墳の主軸がやや西に振ることも前方部を外濠の外に築く必要があったからだろう。また、市野山古墳の外堤に埴輪が樹立していたとすれば、その一部は唐櫃山古墳の埴丘盛土に取り込まれたようで、今回の調査でも埴丘盛土内から円筒埴輪片が発見された。

古墳は周囲の地山を掘削して盛土と周濠を形成したと考えられる。ただし、埴丘盛土は旧地表面に直接、盛土されたものではなく、旧表土は見当たらなかった。したがって、旧表土などを除去したT.P.29.0m程度に平らな面を形成し、盛土していくたと考える。

埴輪は円筒埴輪が大半で、小型・中型品が多く、市野山古墳の埴輪と時期的に共通するが、質的にはやや劣るものようだ。円筒埴輪のほかには朝顔形埴輪・形象埴輪がある。形象埴輪には笠形埴輪と盾形埴輪がある。また、線刻のある不明の埴輪も二点発見されている。円筒埴輪は大半がなま焼成とわかる硬質のもので、暗褐色・暗茶褐色・暗赤褐色などの色調である。須恵器に多い青灰色や灰白色のものはなかった。赤色の色調に仕上げることを意識したと考える。

葺石は大半が人頭大~握拳大で風化をあまり受けていない川原石だった。地山段丘上にもいくらかの円礫が含まれるもの、これらは表面の風化が著しく、意外にも葺石には採用されていないことがわかった。

原位置を保つ葺石はみつからなかった。周濠からみつかった67個について、岩種と産地の分析していただいた結果、本墳東側の石川から約七割が運び込まれたものだった。残りは柏原市国分付近の原川と、柏原市高井田より上流の大和川の川原より採集された礫群がそれぞれ一割程度含まれることが判明した。また、残り一割は丘陵の露岩にみられる割れ石で、これらは柏原市芝山頂上東南に分布する芝山火山岩、柏原市青谷西方付近にみられる片麻状アブライトであった。芝山火山岩は主体部の竪穴式石室の構築材としても利用されたものと考える。以上より、古墳構築材搬入の多様性も判明した。

唐櫃山古墳は主体部の構造や副葬品以外にも円筒埴輪・形象埴輪の実態が判明し、市野山古墳の埴輪と比較して、ほぼ同時期に營まれた前方後円墳であるとされる。ところが、厳密には市野山古墳は埴丘の外側に空濠の周濠があり、その外側に外堤・溝が取り巻くことがわかっている。唐櫃山古墳はその墓域内に營まれているのである。市野山古墳の外堤と外側の溝を調査した一瀬和夫氏はこの溝を外周溝と命名する。それは比高差から水を溜めるものではなく、溝の外側に堤

が見られないことから濠とは峻別すべきという意見である。対して、天野末喜氏は外堤に取り付く外周溝とすれば古墳の本質を見失うとし、この溝は本来堤と堤に挟まれた外濠だったと復元する。小山田宏一氏はもともと古墳の周囲に溝が掘られていたものが、必ずしも水をたたえる必要はない、幅20mに及ぶ状況をかんがみ、濠と呼ぶべきとする。阪田育功氏も外濠と呼んでいる。

いずれにせよ、市野山古墳の堤と溝（濠）が、唐櫃山古墳とどうかかわるのか、被葬者像を考える上で重要である。これまでの調査では市野山古墳の堤に樹立していた可能性のある大型の円筒埴輪が発見され、今回の調査でも少なからず、埴丘盛土内から円筒埴輪片が発見されている。そうすると、位置的に見ても、唐櫃山古墳は市野山古墳の完成後、溝（濠）と外堤の一部を破壊して、造営された古墳であるようだ。

ところが、唐櫃山古墳が市野山古墳とほぼ同時期に造営された陪塚とすれば、これまで主墳の一部を破壊して造営された陪塚は知られておらず、そのような場所に選地した理由が説明しにくい。そうすると、市野山古墳南側の高所にあたる唐櫃山古墳周辺には堤と溝（濠）がもともと造営されていなかった可能性もある。

2節 唐櫃山古墳の被葬者像

それでは、主墳とされる市野山古墳の被葬者はどの様な人物だろうか。現在、市野山古墳は允恭天皇の陵墓に治定されている。『日本書紀』は允恭天皇の没年の春にモガリをはじめ、十月には「河内長野原陵」に埋葬したとする。『古事記』は允恭天皇の陵墓が「河内之恵賀長枝」にあると記す。平安時代の『延喜式』はやや詳しく允恭天皇は「恵我長野北宇」に陵墓があり、それは志紀郡で兆域が東西三町、南北二町という。『扶桑略記』は「河内国志紀郡恵我長野北原陵、高四丈、方三町」という。

古市古墳群は大半が古市郡に属し、志紀郡に一部が及ぶ。郡の境界は定かでないが、恵我の地名が残る藤井寺市周辺で大王墓の候補とされる全長200mを超える大型前方後円墳は市野山古墳のほかに津堂城山古墳・仲津山古墳・岡ミサンザイ古墳のみである。そして、津堂城山古墳・仲津山古墳は300年代の造営とされ、市野山古墳は400年代中頃、岡ミサンザイ古墳は400年代後半の造営とされる。

『古事記』は允恭天皇の崩年干支を「甲午」と記しており、これを信じれば454年であろう。そうすると、陵墓は市野山古墳として異論がなくなるわけだ。

もう少し詳しく見ると、奈良県佐紀遺跡や宇治市遺跡群では初期の須恵器と木製品が発見され、年輪年代測定法による測定結果は400年頃に伐採されたものであるという結果だった。これを評価すれば、わが国にあな窯が導入された時期は400年頃というのである。あな窯の技術は古市古墳群の王墓を飾る埴輪の焼成にもいち早く採用されたようで、初期須恵器が発見された野中古墳の主墳にあたる墓山古墳にみられる。

百舌鳥古墳群を含む大型古墳にみると、津堂城山古墳・仲津山古墳・百舌鳥陵山古墳（履中陵

古墳）は発見されたすべての埴輪が野焼きとされる。菅田御廟山古墳・墓山古墳は野焼きと窯焼きの埴輪が混在して見られ、大仙古墳（仁徳陵古墳）・市野山古墳では大半が窯焼きである。つまり、菅田御廟山古墳の造営段階にあな窯の技術が導入され、採用されたのである。先の年輪年代測定法の成果では400年頃である。菅田御廟山古墳は応神天皇の陵墓とされ、「古事記」にある応神天皇の崩年干支「甲午」は394年と考えられている。これは崩御後の陵墓造営中にあな窯技法が導入されたとして整合する成果なのである。

さらに、市野山古墳を400年代中頃のものとする推論がある。市野山古墳は埴丘形態が茨木市太田茶臼山古墳に酷似することが知られる。また、この古墳を飾る埴輪は高槻市新池埴輪窯群で焼成されたことも判明しており、技法的にも同時期とされる。太田茶臼山古墳は現在、繼体天皇の陵墓に治定されているが、真の陵墓は造営年代や陵墓伝承の検討から見ても高槻市今城塚古墳がふさわしい。今城塚古墳も新池の埴輪窯から埴輪の供給を受けており、太田茶臼山古墳の被葬者と今城塚古墳の被葬者（繼体天皇）は、ともに新池の埴輪工人を管理する同族の可能性が高いのである。

繼体天皇の系譜は『积日本記』が引用する『上宮記』に記されており、応神天皇の五世孫とされる。生前の名はオヲド王で、その父ヒコウシ王は近江に拠点があり、オヲド王の幼年に死別したことが『日本書紀』にある。そして、その曾祖父はオオヲド王と呼ばれ、その名はオ（小）ヲド王に対するオオ（大）ヲド王であり、繼体天皇が曾祖父に影響された命名で、その葬地が唐突に三島であることの解釈として、曾祖父勢力の影響と考えることができるのである。

つまり、今城塚古墳の被葬者をオ（小）ヲド王とすれば、太田茶臼山古墳の被葬者はオオ（大）ヲド王ではないかというものである。そして、オオ（大）ヲド王は允恭天皇皇后（忍坂大姫）と后妃（衣通姫）の弟でもある。つまり、オオ（大）ヲド王は允恭天皇にゆかりの深い同世代の人物でもあり、市野山古墳が允恭天皇の陵墓で間違ないとすれば、太田茶臼山古墳と同時にに當まれ、埴丘形態が酷似する訳も説明できるのである。

以上から、市野山古墳を允恭天皇の陵墓と認め、454年の崩御から程なく造営が開始され、その後完成後、外堤や外濠の一部を削って唐櫃山古墳が陪塚として造営されたとすれば、その被葬者は允恭天皇にかかわりが深く、陪塚に葬られた者の内でも筆頭的な有力者と推定できよう。

允恭天皇については、『宋書』倭国伝に記された倭の五王、讚・珍・濟・興・武のうち、濟と考えられ、五王の研究は江戸時代より数多く積み上げられている（図27）。讚は421年、425年の朝貢でその名が見え、珍は438年の朝貢に名が見える。濟は443年の朝貢で安東將軍倭国王の称号に任命され、451年の朝貢でさらに安東大將軍倭国王に進み、六国諸軍事の称号も下賜される。このうち、460年に朝貢の記事はあるが、王の名はない。462年に倭王世子として興が立ち、安東將軍倭国王の称号に任命される。

さらに、477年と478年に朝貢記事があり、興が没して、弟の武が立ったとある。そして、安東大將軍倭国王と六国諸軍事の称号を下賜される。

以上の朝貢記事から454年に没した允恭天皇を済とし、462年に息子の安康天皇が興として朝貢、「辛亥」年銘鉄剣から476年には即位していたことが確認されるワカタケル大王（＝雄略天皇）が武として478年の朝貢記事に登場するのである。中国の正史は済と興が親子し、興と武は兄弟と記す。これは記紀にある允恭天皇と安康天皇が親子で安康天皇と雄略天皇が兄弟であることと符合し、年代的にも整合するので異論は少ない。ところが、『宋書』倭国伝は珍と済の関係を記さない。

この記事を特に重視し、珍と済の間に断絶があり、王統の交替を唱える説が藤間生夫氏や原島礼二氏によって、提唱されている。また、443年に新たな勢力として允恭天皇が即位することによって、多くの地域で大型前方後円墳が造られなくなり、帆立貝形古墳や造りだし付きの円墳が点々と現れるという現象に対応させる意見もある。それは前代までの地域大首長を抑圧し、地域内に押さえ込まれていた諸首長を、より王権に従属的な形に編成したものと解釈されている。こうした刷新を推し進めたのが、済=允恭天皇であるとする。

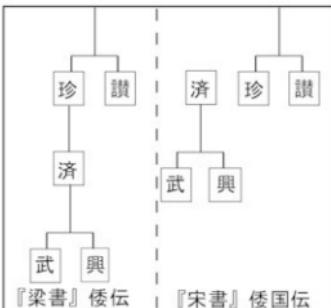
岸本直文氏によるこの意見ではその陵墓を最大規模の大型前方後円墳である大仙古墳とまで推定する。岸本氏は、該当期の大和においてもっとも発展する葛城地域の古墳群の消長とも対応させる。御所地域の室宮山古墳やカанс塚古墳の造営以後、首長墓の断絶する現象は、允恭天皇や雄略天皇による葛城地域を拠点とした玉田宿禰や円大臣の肅清に影響を受けたものとする。ただし、応神天皇の陵墓を津堂城山古墳に求め、河内王朝の始祖とする岸本氏の論は、大半の陵墓伝承を否定し、古墳の年代観も新しく見積もっている。

例えは、市野山古墳を履中天皇第一皇子の市辻押磐皇子の墓と推論する。『日本書紀』はこの皇子が雄略天皇によって近江で暗殺され、顯宗天皇時代に遺体が見つけ出されたものの、近江国来田綿の蚊帳原に墓が造られて再埋葬されたと伝える。この伝承を切り捨てて、履中天皇の第一皇子が早世したとしても履中天皇の陵墓を百舌鳥陵山古墳とすれば、市野山古墳との年代的隔絶が問題となろう。仮に、皇子が雄略天皇に肅清後、すみやかに造墓されたとしても、雄略天皇の陵墓と推測する岡ミサンザイ古墳と同規模で、しかも多くの陪塚を具備する市辻押磐皇子墓が雄略天皇時代に古市古墳群内で造営された理由は説明しにくいだろう。

以上に対し、坂元義種氏は『梁書』倭伝の珍と済を親子関係は評価できると説き、雄略天皇までの治世がすみやかに継承され、武の上表文にある「自昔祖禰」は珍やそれ以前の皇統とされている。また、鈴木靖民氏も履中・反正の外交権がそのまま允恭に継承されており、それを初代としても決定的な歴史像の書きかえを迫るものではないと学史を振り返っている。

讃・珍・済が兄弟としても、仁徳天皇と磐之姫の間に生まれた兄弟にあてることは五王の朝貢年代の長さからしても整合しない。履中天皇・反正天皇・允恭天皇は同時代の人物であり、年齢差からみても在位期間が短かったはずである。そうすると、天皇と記されていない皇子を五王に検討するか、三兄弟の血縁を見直すかといった意見に分かれ、結論をみない。

わたしは『宋書』倭国伝の朝貢記事の中でも、珍と済の記事に注目している。南宋皇帝は珍の



西暦	王朝	王	記事	出典文献
413	東晋	謙	・倭國、方物を献上する。 ・倭王使いを遣わせて朝貢する。	『晋書』本紀 『南史』列伝
421		謙	・誰が朝貢し、除授を請う。	『宋書』列伝
425		謙	・誰が朝貢し、上表文を奉って方物を献上する。	『宋書』列伝
430			・倭王使いを遣わせて朝貢する。	『宋書』本紀
438		珍	・倭王珍に安東將軍を除授する。 ・誰が死んで、弟の珍がたつ。使いを遣わせて朝貢する。安東將軍倭國王に除す。珍は倭隋を平西・征虜・冠軍・輔國將軍を請う。あわせで除す。	『宋書』本紀 『宋書』列伝
443		濟	・倭王使いを遣わせて方物を献上する。 ・倭王濟、使いを遣わせて朝貢する。安東將軍倭國王に除す。	『宋書』本紀 『宋書』列伝
451	宋	濟	・倭王濟、安東將軍倭國王から進号する。 ・倭王濟に使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・茲韓六國諸軍事の称号を加える。また、二三人を軍部に除す。	『宋書』本紀 『宋書』列伝
460			・倭王使いを遣わせて方物を献上する。	『宋書』本紀
462		興	・倭王世子興を安東將軍倭國王に除す。 ・渙が死んで、世子の興が使いを遣わせて朝貢する。安東將軍倭國王に除す。	『宋書』本紀 『宋書』列伝
477		武	・倭王使いを遣わせて方物を献上する。	『宋書』本紀
478		武	・倭王武、使いを遣わせて方物を献上する。安東大將軍倭國王に除す。 ・興が死んで、武がたつ。使いを遣わして上表し、武を使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・茲韓六國諸軍事安東大將軍倭國王に除す。 ・使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・茲韓六國諸軍事安東大將軍倭國王に除す。	『宋書』本紀 『宋書』列伝
479	齊	武	・倭王武、征東將軍倭國王に進号する。 ・倭王武、征東大將軍倭國王に進号する。	『南齊書』列伝
502	梁			『梁書』本紀・列伝 『南史』列伝

王朝の存続: 東晋(317~420年)・宋(420~479年)・齐(479~502年)・梁(502~557年)

図27 中国史料による倭の五王、記紀による天皇の系譜

朝貢時、倭隋など十三人に平西・征虜・冠軍・輔国將軍の号を除正している。また、済の朝貢時にも「軍郡」に二十三人を除す、とある。安東將軍の倭珍に対する平西將軍の倭隋などは官位や表記に格差がほとんどないため、副王的存在という意見や王族のひとり、地方首長という意見などがある。「軍郡」についても中国の官制になく、単に武官と地方文官を示すという意見や「軍号」の誤記という意見などがある。

いずれにせよ、五王の中で、中国皇帝から下部組織まで多数の官職を除されたのは二人の王だけである。済を允恭天皇、珍をその父の仁徳天皇とすれば、二人は他の大王墓と比べ、突出した陪塚の数を備えた陵墓に葬られているのではないか。それは百舌鳥・古市古墳群中で特に陪塚が発達する市野山古墳と大仙古墳でもある。そうすると、年代的にも整合し、記紀にある陵墓伝承とも整合する。そして、それは唐櫃山古墳の被葬者像を示すものもあると考える。

引用文献

- 北野耕平（1962）『唐櫃山古墳の調査』『大阪府の文化財』大阪府教育委員会
- 藤間生夫（1968）『倭の五王』岩波書店
- 原島礼二（1970）『倭の五王とその前後』塙書房
- 笠井倭人（1973）『研究史 倭の五王』吉川弘文館
- 大阪大学（1976）『河内野中古墳の研究』
- 坂元義種（1978）『古代東アジアの日本と朝鮮』吉川弘文館
- 鈴木靖民（1980）『古代国家史研究の歩み』新人物往来社
- 大阪府教育委員会（1980）『国府遺跡発掘調査概要』X
- 大阪府教育委員会（1980）『允恭陵古墳外周濠・長持山古墳の調査』
- 大阪府教育委員会（1981）『国府遺跡発掘調査概要』X I
- 大阪府教育委員会（1981）『允恭陵古墳外堤の調査』
- 大阪府教育委員会（1982）『唐櫃山古墳発掘調査概要』
- 藤井寺市教育委員会（1987）『石川流域遺跡群発掘調査報告』II
- 藤井寺市教育委員会（1989）『石川流域遺跡群発掘調査報告』IV
- 藤井寺市教育委員会（1993）『新版 古市古墳群』
- 藤井寺市教育委員会（1997）『石川流域遺跡群発掘調査報告』X II
- 大阪府教育委員会（2001）『唐櫃山古墳』
- 北野耕平（2002）『唐櫃山古墳とその墓制をめぐる諸問題』『藤澤一夫先生卒寿紀念論文集』
- 西川寿勝・森田克行・鹿野豊（2007）『繼体天皇二つの陵墓、四つの王宮』新泉社
- 大阪府教育委員会（2009）『林遺跡・国府遺跡・土師の里遺跡』
- 西川寿勝・田中晋作（2010）『倭王の軍団』新泉社
- 岸本直文『古墳の時代』（2010）『史跡で読む日本の歴史』2 吉川弘文館

播 図 番 号	図版	実測 番号	地区	造構・層位	器種	播 図 番 号	図版	実測 番号	地区	造構・層位	器種
1	14上	118	20	東周漆埋土	サヌカイト製石核	44	8上	42	20	東周漆埋土	円筒埴輪体部
2	14上	119	19	東周漆葺石上面	サヌカイト製石核	45	—	67	19	東周漆埋土	円筒埴輪体部
3	14上	117	19	東周漆埋土	須恵器杯蓋	46	8上	39	27	満2	円筒埴輪体部
4	14下	116	19	東周漆葺石直上	須恵器甕	47	—	73	19	東周漆埋土	円筒埴輪体部
5	7下	13	16	東周漆埋土	円筒埴輪口縁部	48	—	69	23	東周漆埋土	円筒埴輪体部
6	7下	168	15	填丘東斜面	円筒埴輪口縁部	49	11	83	23	東周漆埋土	円筒埴輪体部
7	7下	8	19	東周漆埋土	円筒埴輪口縁部	50	11	84	21	表土	円筒埴輪体部
8	7下	9	20	東周漆埋土	円筒埴輪口縁部	51	11	85	20	東周漆埋土	円筒埴輪体部
9	7下	10	20	東周漆埋土	円筒埴輪口縁部	52	11	86	15	填丘東斜面	円筒埴輪体部
10	7下	11	13	表土	円筒埴輪口縁部	53	9上	43	12	表土	円筒埴輪底部
11	7下	12	5	表土	円筒埴輪口縁部	54	9上	44	20	東周漆埋土	円筒埴輪底部
12	7下	14	17	表土	円筒埴輪口縁部	55	9上	45	27	表土	円筒埴輪底部
13	7上	4	20	東周漆埋土	円筒埴輪口縁部	56	9上	46	27	満2	円筒埴輪底部
14	7上	2	19・20	東周漆埋土	円筒埴輪口縁部	57	9上	47	11	表土	円筒埴輪底部
15	7上	3	20・21	東周漆埋土	円筒埴輪口縁部	58	9上	48	18	表土	円筒埴輪底部
16	7上	1	23	東周漆埋土	円筒埴輪口縁部	59	9上	49	20	東周漆埋土	円筒埴輪底部
17	7下	17	20	東周漆埋土	円筒埴輪口縁部	60	9上	50	22	東周漆埋土	円筒埴輪底部
18	7下	15	24	東周漆埋土	円筒埴輪口縁部	61	9上	51	20	東周漆埋土	円筒埴輪底部
19	7下	115	20	東周漆埋土	円筒埴輪口縁部	62	9上	52	19	東周漆埋土	円筒埴輪底部
20	7下	16	21	表土	円筒埴輪口縁部	63	9上	53	20	東周漆埋土	円筒埴輪底部
21	7下	18	19	東周漆埋土	円筒埴輪口縁部	64	9上	54	23	東周漆埋土	円筒埴輪底部
22	7下	19	21	表土	円筒埴輪口縁部	65	9下	55	12	表土	円筒埴輪底部
23	8下	20	15	填丘東斜面	円筒埴輪体部	66	9下	60	20	東周漆埋土	円筒埴輪底部
24	8下	21	23	東周漆埋土	円筒埴輪体部	67	9下	59	20	東周漆埋土	円筒埴輪底部
25	8下	23	23	東周漆埋土	円筒埴輪体部	68	9下	57	18	表土	円筒埴輪底部
26	8下	25	20	表土	円筒埴輪体部	69	9下	56	27	表土	円筒埴輪底部
27	8下	24	19	東周漆埋土	円筒埴輪体部	70	9下	58	22	東周漆埋土	円筒埴輪底部
28	8下	22	20	東周漆埋土	円筒埴輪体部	71	—	5	16	表土	円筒埴輪底部
29	8上	33	27	満2	円筒埴輪体部	72	10上	64	20	東周漆埋土	円筒埴輪底部
30	8上	31	20	東周漆埋土	円筒埴輪体部	73	10上	65	21	東周漆埋土	円筒埴輪底部
31	8上	32	5	表土	円筒埴輪体部	74	10上	66	21	東周漆埋土	円筒埴輪底部
32	8下	28	19	東周漆葺石上面	円筒埴輪体部	75	10上	63	17	東周漆埋土	円筒埴輪底部
33	8上	30	20	東周漆埋土	円筒埴輪体部	76	9下	62	20	東周漆埋土	円筒埴輪底部
34	8下	26	23	東周漆埋土	円筒埴輪体部	77	9下	61	20	東周漆埋土	円筒埴輪底部
35	8下	27	10	表土	円筒埴輪体部	78	13下	106	19	東周漆葺石直上	朝顔形埴輪口縁部
36	8下	29	22	表土	円筒埴輪体部	79	13下	95	24	東周漆埋土	朝顔形埴輪口縁部
37	8上	41	23	東周漆埋土	円筒埴輪体部	80	13下	97	23	東周漆埋土	朝顔形埴輪口縁部
38	8上	40	19	東周漆埋土	円筒埴輪体部	81	13下	98	20	東周漆埋土	朝顔形埴輪口縁部
39	8上	35	10	表土	円筒埴輪体部	82	13下	99	23	東周漆埋土	朝顔形埴輪口縁部
40	8上	36	22	東周漆埋土	円筒埴輪体部	83	13下	100	19	東周漆葺石上面	朝顔形埴輪口縁部
41	8上	37	24	東周漆埋土	円筒埴輪体部	84	13下	101	24	東周漆埋土	朝顔形埴輪口縁部
42	8上	34	19・20	東周漆埋土	円筒埴輪体部	85	13下	102	18	表土	朝顔形埴輪口縁部
43	8上	38	22	東周漆埋土	円筒埴輪体部	86	13下	103	19	東周漆埋土	朝顔形埴輪口縁部

図28 実測遺物対照表1

播 図 番 号	図版	実測 番号	地区	造構・層位	器種	播 図 番 号	図版	実測 番号	地区	造構・層位	器種
87	13下	104	20	東周漆埋土	朝顔形埴輪口縁部	129	16上	126	24	東周漆埋土	土師器小壺
88	13下	96	23	東周漆埋土	朝顔形埴輪口縁部	130	16上	124	23	東周漆埋土	土師器小壺
89	13下	105	23	東周漆埋土	朝顔形埴輪口縁部	131	—	142	32	溝3	土師質土器皿
90	12	94	22	表土	形象埴輪?	132	16下	145	32	溝3	瓦器皿
91	12	93	21・22	東周漆埋土	形象埴輪?	133	—	169	32	溝3	土師質土器皿
92	7下	7	19	東周漆埋土	朝顔形埴輪口縁部	134	16下	146	32	溝3	瓦器皿
93	7下	6	19	東周漆埋土	朝顔形埴輪口縁部	135	16下	144	32	溝3	瓦器皿
94	—	70	20	東周漆埋土	朝顔形埴輪口縁部	136	16下	143	32	溝3	土師質土器皿
95	13上	109	20	東周漆埋土	朝顔形埴輪口縁部	137	17上	163	1	表土	瓦器碗
96	13上	110	19	東周漆葺石直上	朝顔形埴輪口縁部	138	17上	164	5	表土	瓦器碗
97	13上	107	20	東周漆埋土	朝顔形埴輪口縁部	139	16下	147	32	溝3	瓦器碗
98	13上	108	5	表土	朝顔形埴輪口縁部	140	16下	148	32	溝3	瓦器碗
99	13上	113	21	表土	朝顔形埴輪口縁部	141	16下	150	32	溝3	瓦器碗
100	13上	112	20	東周漆埋土	朝顔形埴輪口縁部	142	16下	151	32	溝3	瓦器碗
101	13上	114	20	東周漆埋土	朝顔形埴輪口縁部	143	17上	161	21	東周漆埋土	土師質土器壺
102	13上	111	20	表土	朝顔形埴輪口縁部	144	16下	154	32	溝3	土師質土器皿
103	12	92	32	溝3	盾形埴輪	145	16下	155	32	溝3	土師質土器羽釜
104	12	87	19	東周漆葺石直上	笠形埴輪立飾り	146	16下	152	32	溝3	瓦質土器羽釜
105	12	90	22	東周漆埋土	笠形埴輪立飾り	147	16下	153	32	溝3	土師質土器羽釜
106	12	88	5	表土	笠形埴輪立飾り	148	17上	162	19	東周漆埋土	瓦質土器すり鉢
107	12	91	20	東周漆埋土	笠形埴輪立飾り	149	17上	159	14	表土	瓦質土器すり鉢
108	12	89	3	表土	笠形埴輪立飾り	150	17上	160	16	土坑16-1	陶器すり鉢
109	10下	79	7	填丘土	円筒埴輪口縁部	151	16下	149	32	溝3	東播系すり鉢
110	10下	81	7	填丘土	円筒埴輪体部	152	17上	157	16	表土	土師質土器皿(灯明皿)
111	10下	80	6	填丘土	円筒埴輪体部	153	17上	158	20	東周漆埋土	土師質土器皿(灯明皿)
112	10下	76	11	填丘土	円筒埴輪体部	154	17中	137	17	東周漆埋土	肥前磁器蓋
113		72	7	填丘土	円筒埴輪体部	155	17中	170	15	填丘東斜面	肥前磁器蓋
114	10下	71	7	填丘土	円筒埴輪体部	156	17中	131	13	填丘土直上	肥前磁器碗
115	10下	77	6	填丘土	円筒埴輪体部	157	17中	132	23	東周漆埋土	肥前陶器碗
116	10下	74	7	填丘土	円筒埴輪体部	158	17中	134	1	表土	肥前磁器碗
117	10下	78	11	填丘土	円筒埴輪体部	159	17中	138	1	表土	肥前磁器碗
118	10下	68	7	填丘土	円筒埴輪体部	160	17中	133	17	東周漆埋土	肥前磁器碗
119	10下	82	13	填丘土	円筒埴輪底部	161	17中	135	21	表土	肥前磁器碗
120	10下	75	11	填丘土	円筒埴輪底部	162	17中	141	19	東周漆埋土	肥前磁器碗
121	16上	128	23	東周漆埋土	土師器杯	163	17中	140	23	東周漆埋土	肥前磁器碗
122	16上	129	23	東周漆埋土	土師器杯	164	17中	136	16	表土	肥前磁器碗
123	16上	122	24	東周漆埋土	土師器小壺	165	17中	139	16	土坑16-1	肥前磁器碗
124	16上	123	24	東周漆埋土	土師器小壺	166	15上	165	16	表土	石製硯
125	16上	121	24	東周漆埋土	土師器小壺	167	17上	156	12	表土	土製人形
126	16上	120	23	東周漆埋土	土師器小壺	168	17下	166	19	東周漆埋土	唐草紋軒平瓦
127	16上	127	23	東周漆埋土	土師器小壺	169	17下	167	17	東周漆埋土	巴紋軒丸瓦
128	16上	125	23	東周漆埋土	土師器小壺	170	15下	130	17	表土	鉢型

図29 実測遺物対照表2

報告書抄録

ふりがな	からとやまこふん
書名	唐櫃山古墳
副書名	
巻次	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	2010-2
編著者名	西川寿勝・奥田尚・加藤治樹
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351 (代表)
発行年月日	平成23年3月31日

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°°°	°°°			
からとやまこふん 唐櫃山古墳	大阪府藤井寺市 国府1丁目	27226	9	34° 34° 07"	135° 37° 06"	平成21年9月10 日～平成21年10 月31日	150m ²	主要地方道堺大和高 田線の歩道整備工事

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
唐櫃山古墳	古墳	古墳	後円部埴丘 周濠	円筒埴輪 葺石	
要 約			唐櫃山古墳の後円部埴丘と周濠の一部を確認した。周濠などから円筒埴輪が出土した。 また、埴丘盛土からも埴輪が出土しており、市野山古墳外堤などのもの可能性がある。 周濠内から発見された葺石は、本墳東側の石川から七削、柏原市国分付近の原川と柏原市高井田より上流の大和川の川原より採集された砾群がそれぞれ一割程度含まれることが判明した。 残りの一割は、露岩にみられる割れ石で、これらは柏原市芝山頂上東南に分布する芝山火山岩、奈良県王寺町亀の瀬付近にみられるドトコロ火山岩、柏原市青谷西方付近にみられる片麻状アブライドであった。		

図版



調査区全景（西から）

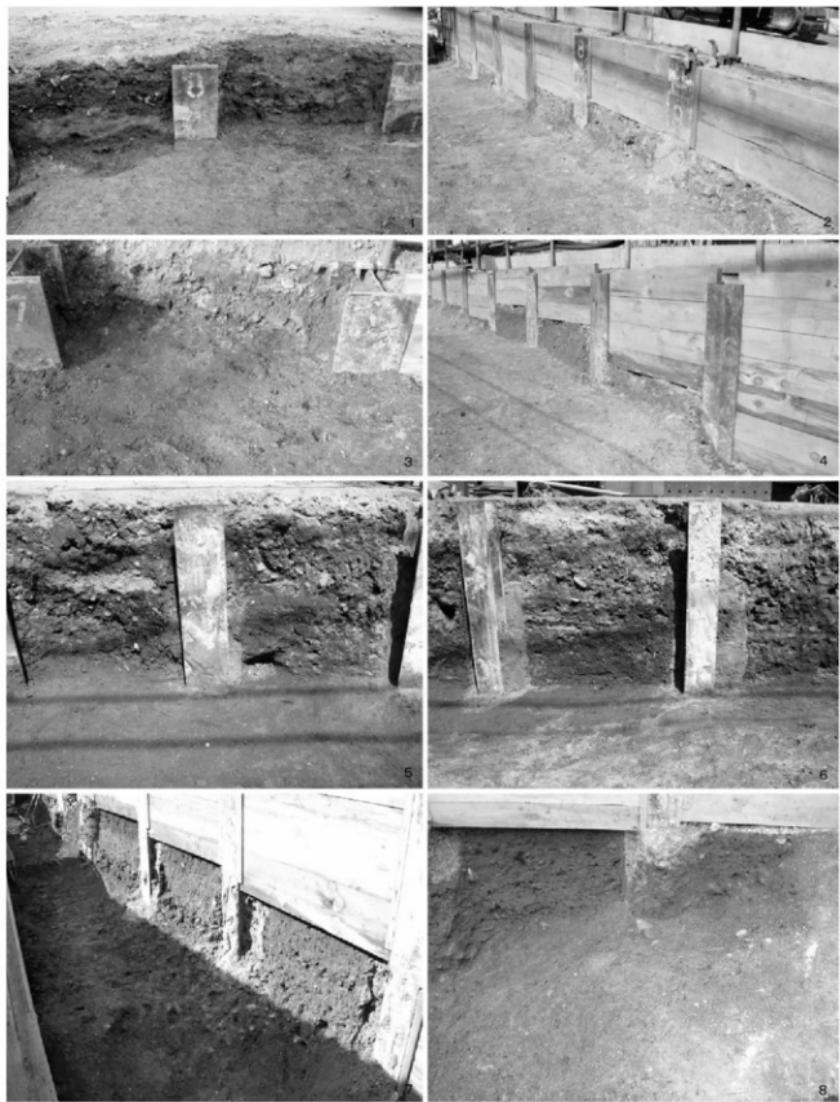


1 調査着手前 (2009年8月 東から) 2 同上 (2009年8月 西から)



1 境丘上面掘削状況（東から） 2 同上（北から）

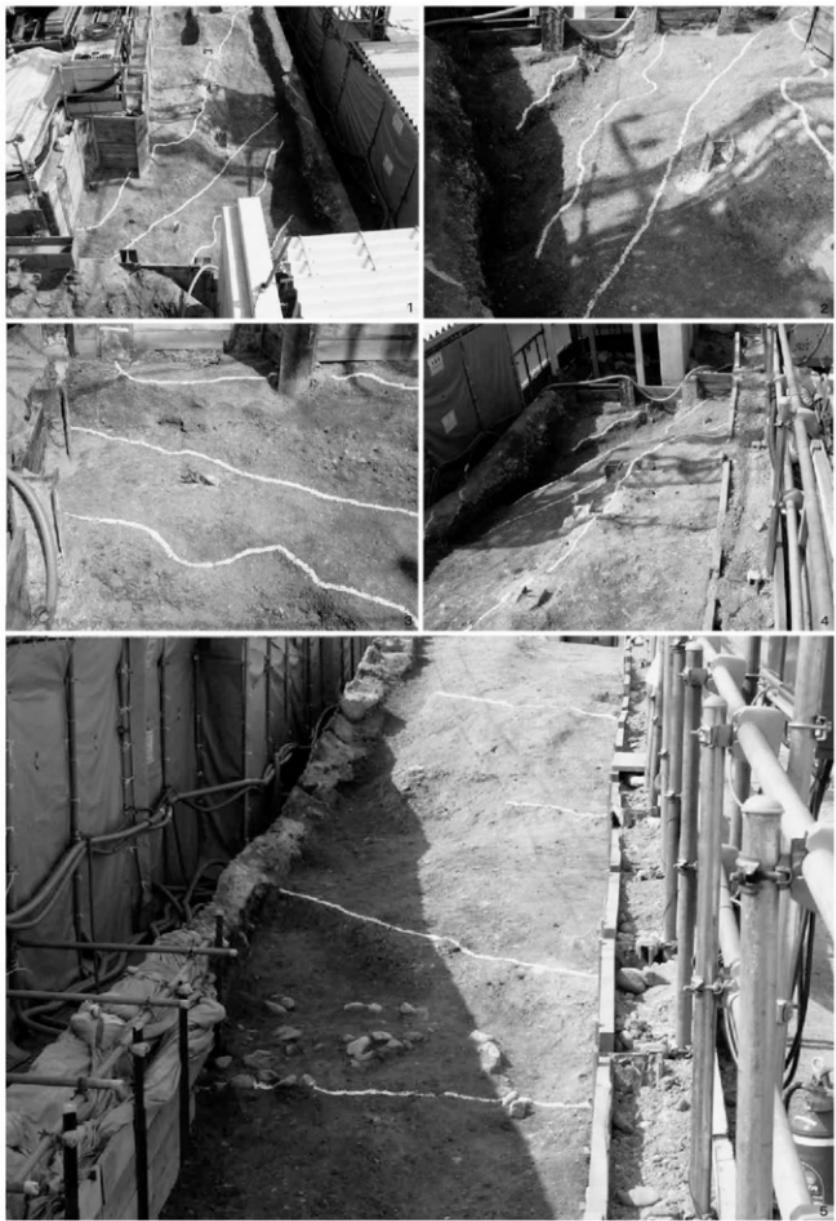
図版3 墳丘および周濠堆積状況



1 北壁 6・7 ライン上層（填丘上面） 2 北壁 6～8 ライン下層（填丘土）
3 北壁 12 ライン上層（填丘上面） 4 北壁 12～14 ライン下層（填丘土）
5 北壁 17・18 ライン上層（周濠上面） 6 北壁 25・26 ライン（周濠上面）
7 北壁 17～19 ライン下層（周濠埋土） 8 北壁 24・25 ライン下層（周濠埋土）



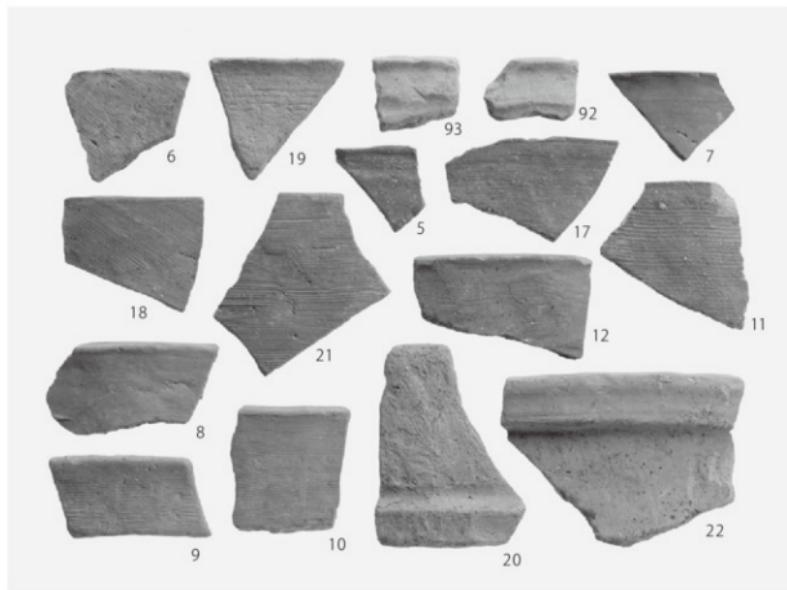
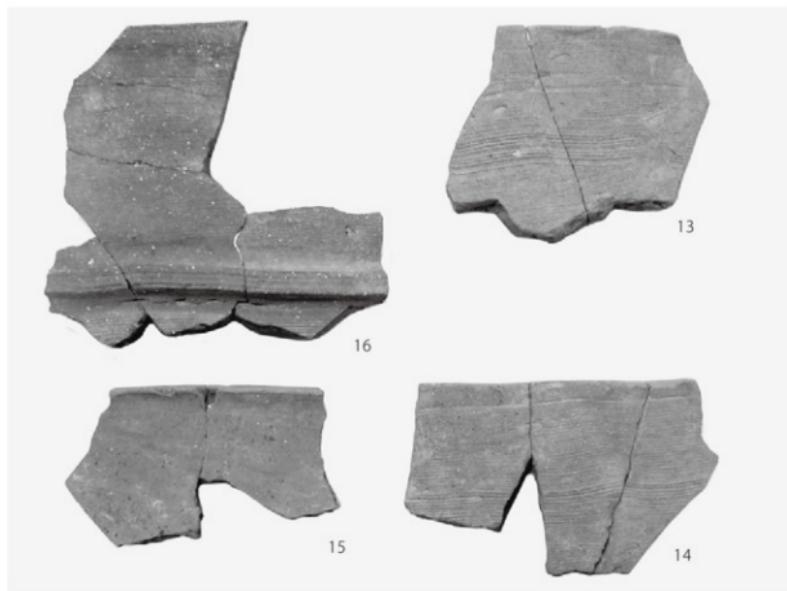
1 填丘全景（西から） 2 填丘盛土除去後全景（西から）



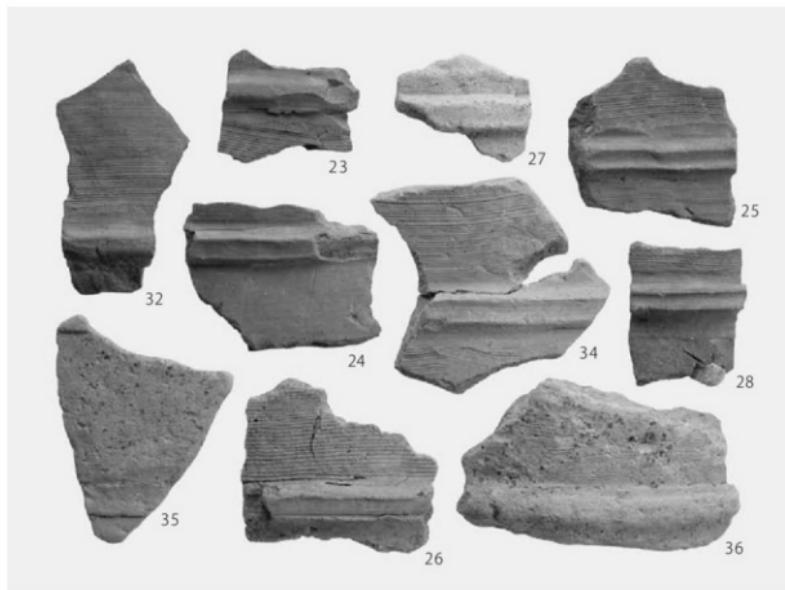
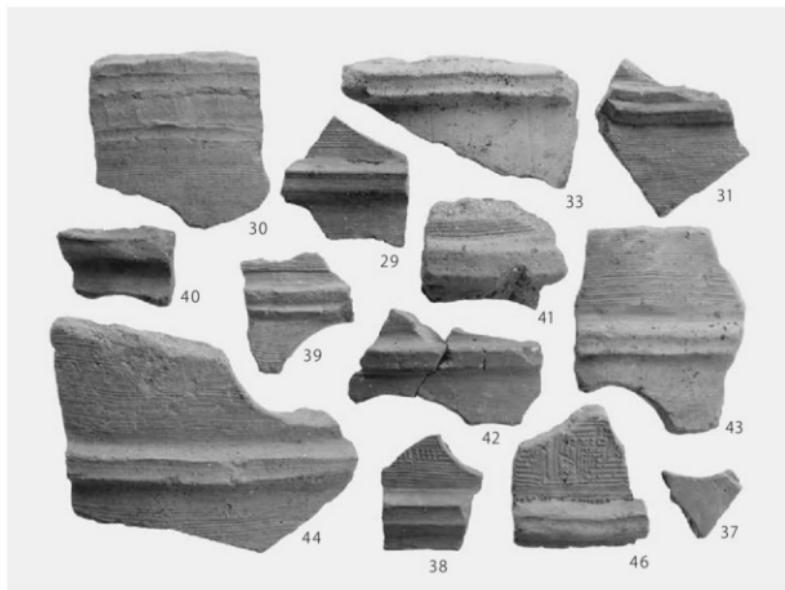
1～4 後円部西側周濠全景 5 後円部東側周濠全景（東から）



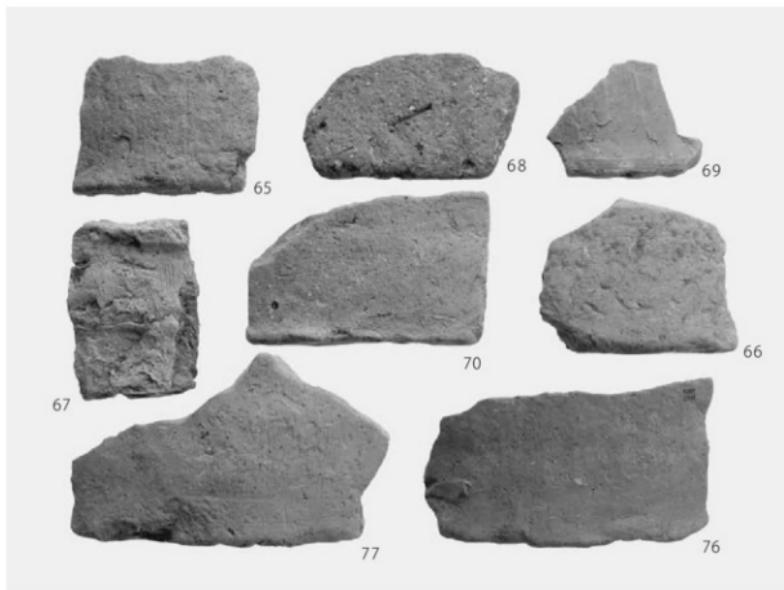
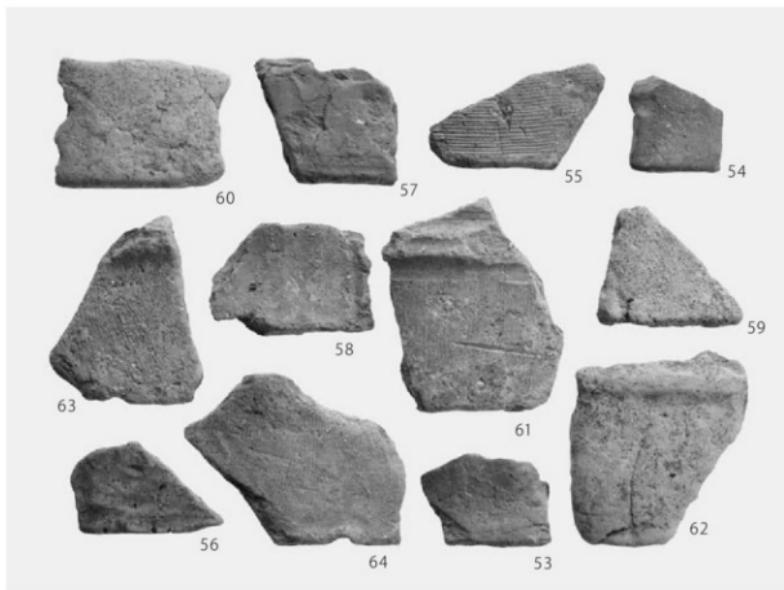
1 溝1(北から) 2 溝2(北から)



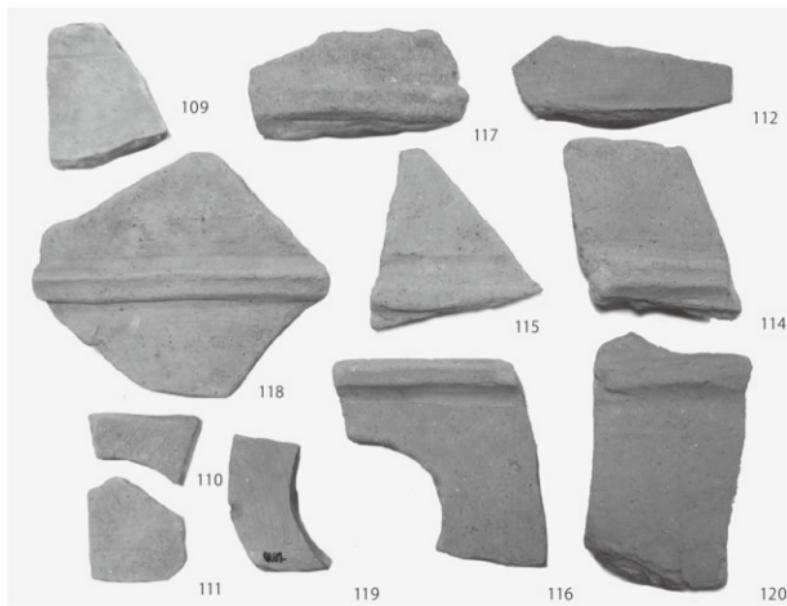
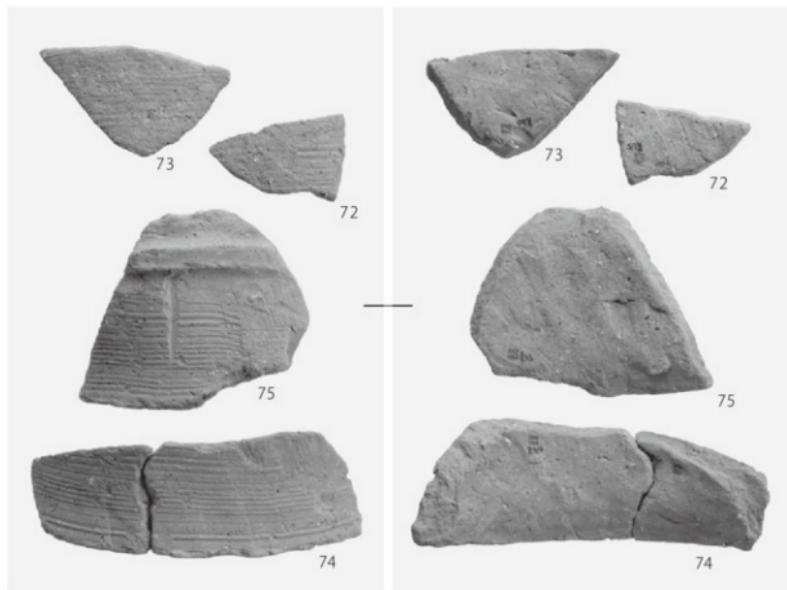
図版8 円筒埴輪体部



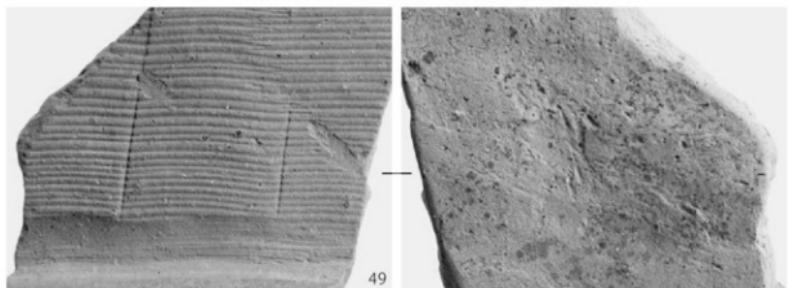
図版9 円筒埴輪底部



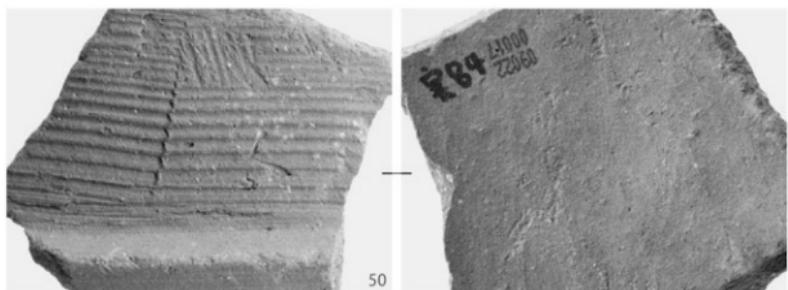
図版10 円筒埴輪底部・墳丘盛土内出土埴輪



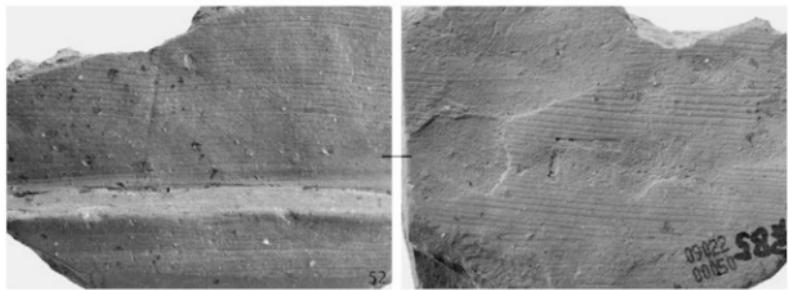
図版 11
円筒埴輪細部



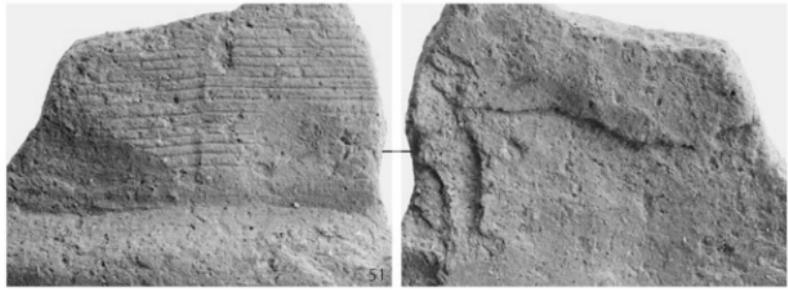
49



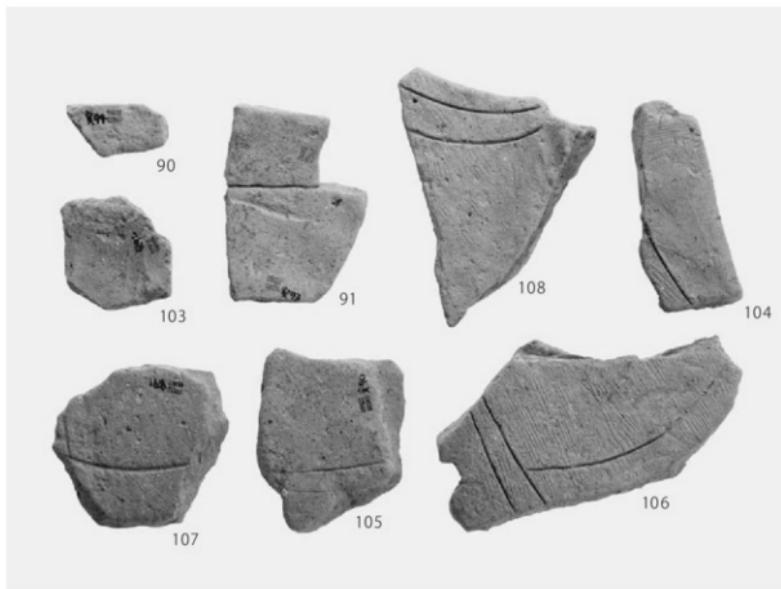
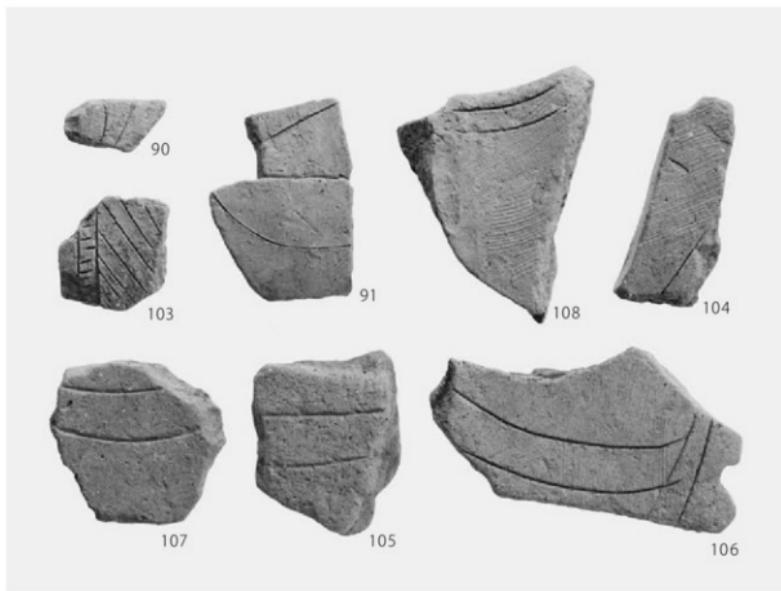
50

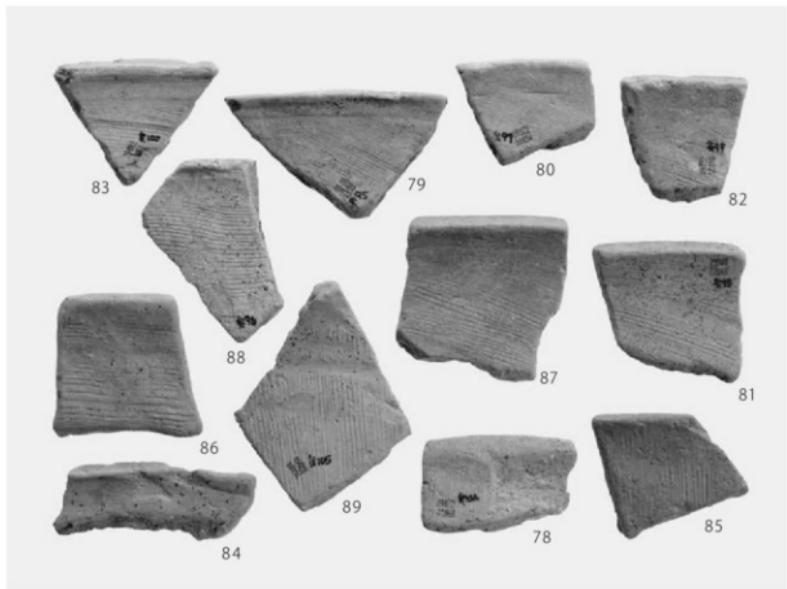
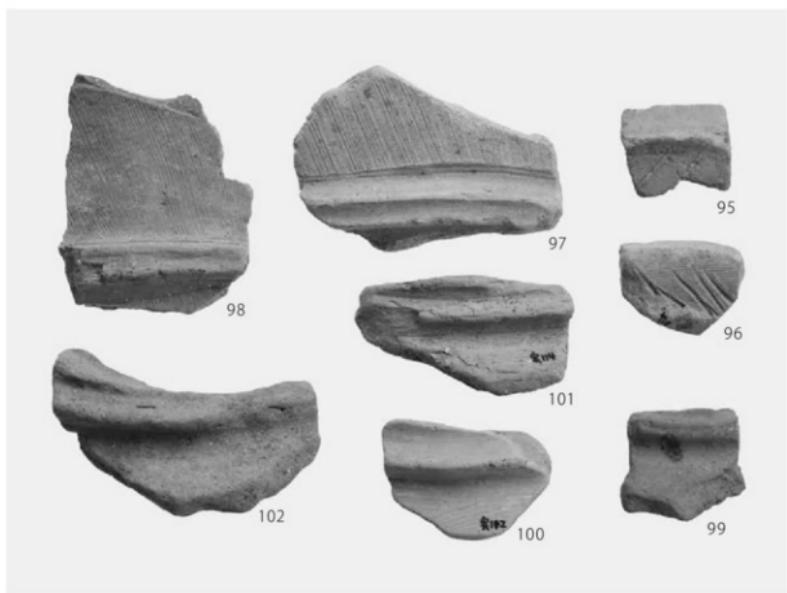


52

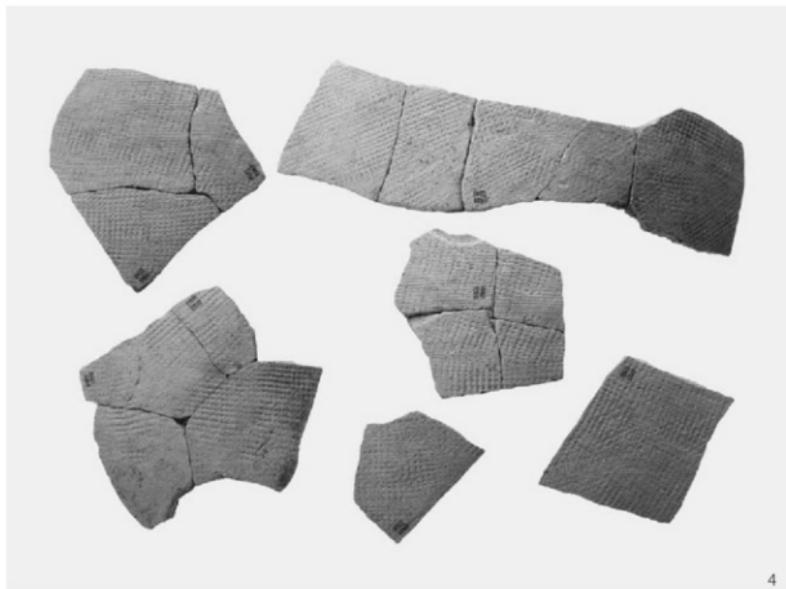
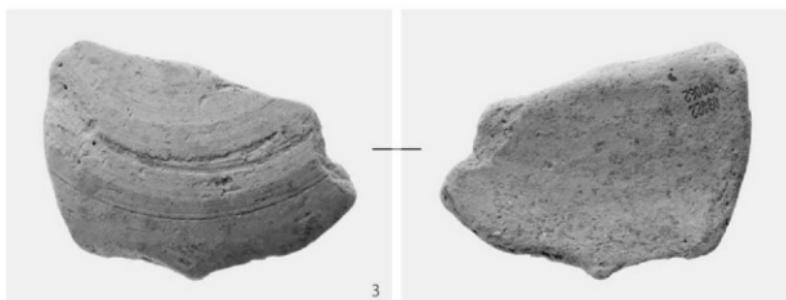
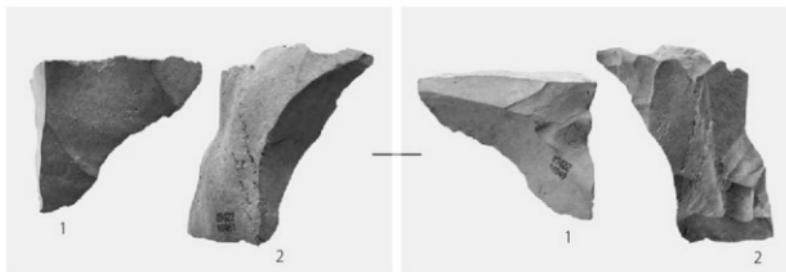


51



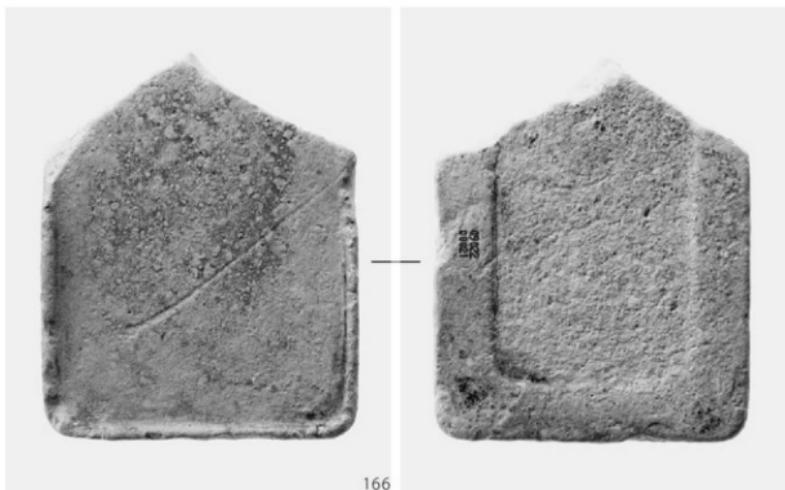


図版 14 サヌカイト石核・須恵器

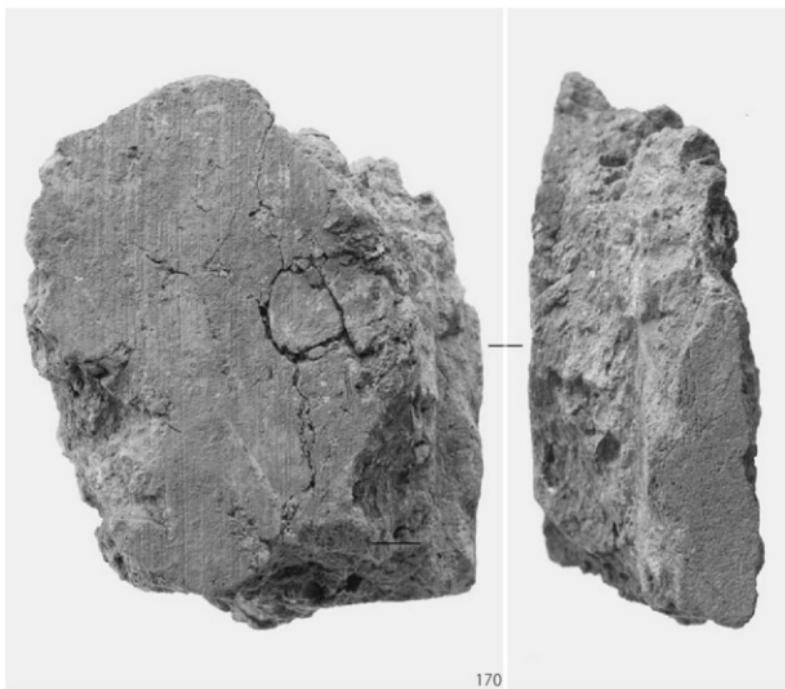


4

図版 15 石製硯・不明鋳型

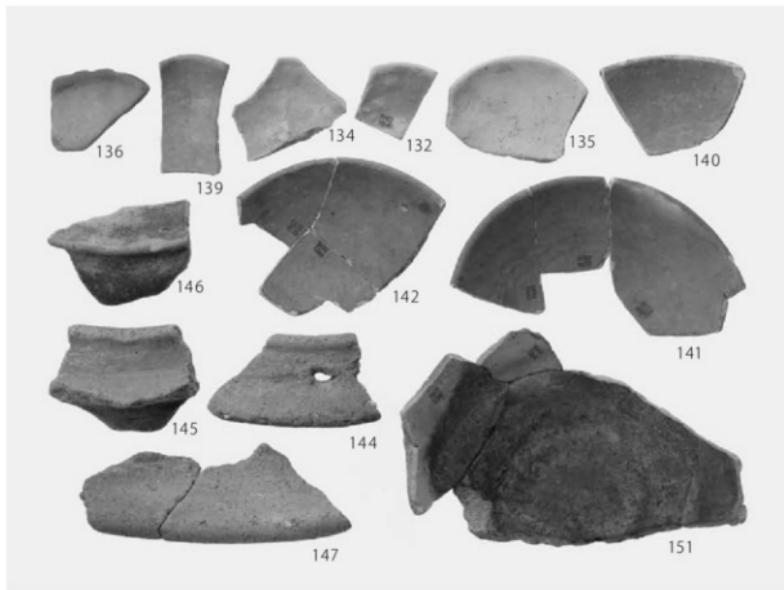
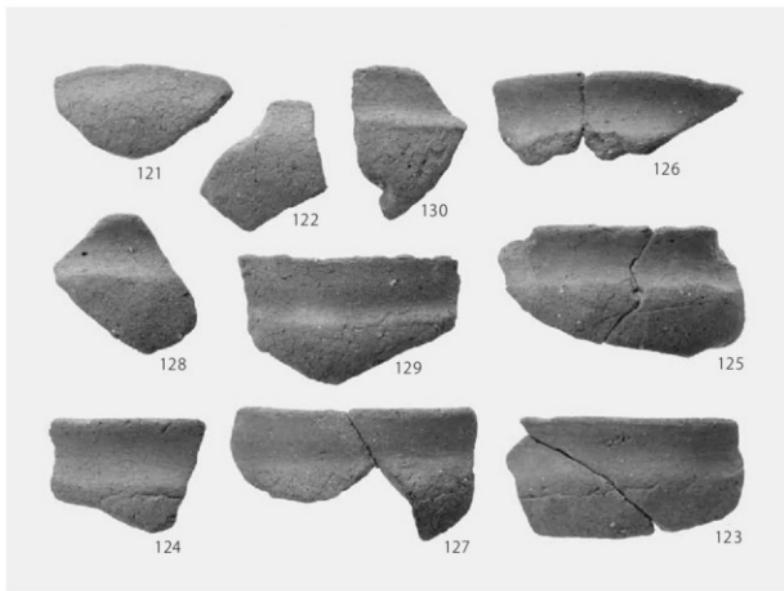


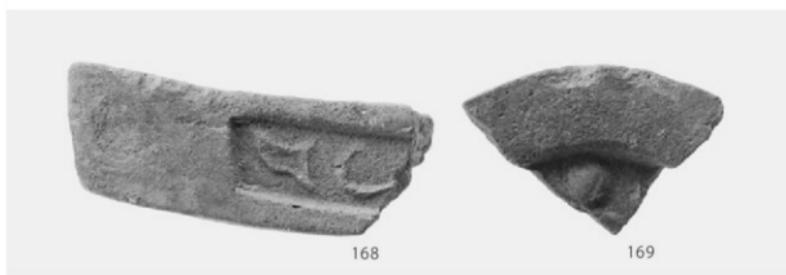
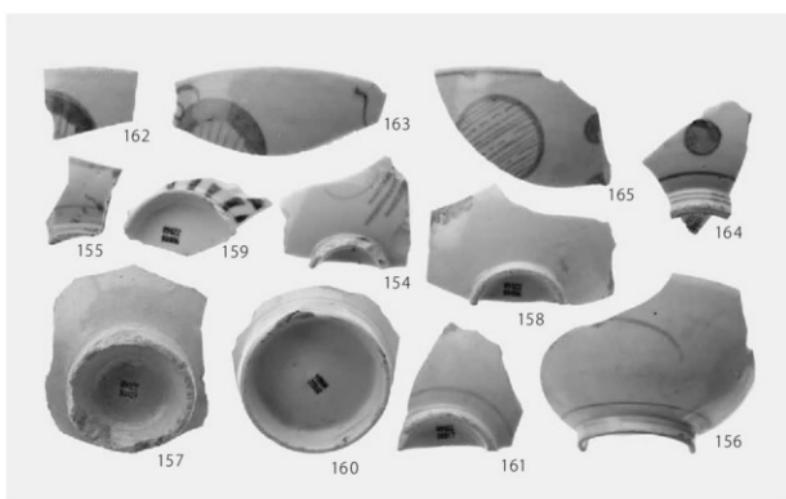
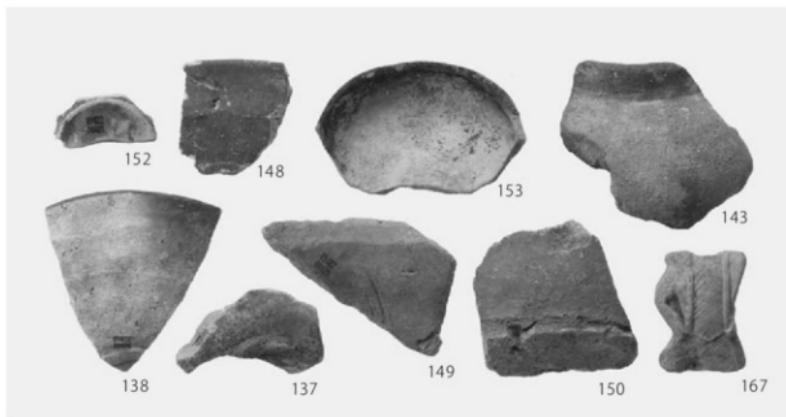
166



170

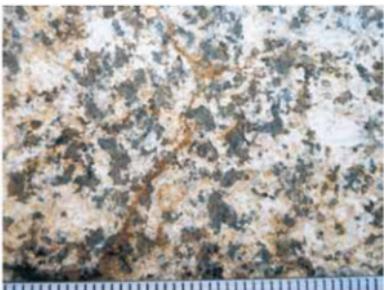
図版 16 古代の遺物・溝3出土遺物







黒雲母花崗岩（石川の川原石）



斑礫岩



片麻状アPLITE（青谷付近の石）



片麻状黒雲母花崗岩（石川の川原石）



流紋岩（石川の川原石）



安山岩



輝石安山岩A（ドロコロ火山岩）



輝石安山岩B（春日山火山岩）



輝石安山岩（サヌカイト）



橄欖石安山岩（芝山火山岩）



流紋岩質溶結凝灰岩（石川の川原石）



流紋岩質火山疊凝灰岩A（石川の川原石）



流紋岩質火山疊凝灰岩A（石川の川原石）



疊岩（石川の川原石）



疊質砂岩（石川の川原石）



砂岩（石川の川原石）

大阪府埋蔵文化財調査報告2010-2

唐櫃山古墳

発行 大阪府教育委員会

〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目

TEL 06-6941-0351 (代表)

発行日 平成23年3月31日

印刷 株近畿印刷センター

〒582-0001 柏原市本郷5丁目6番25号